

第三帝国の全面的敗退過程とアウシュヴィッツ 1942-1945

永 岑 三千輝

はじめに

1. 多機能複合施設としてのアウシュヴィッツ 1940-41
2. ツィクロンB実験と戦時捕虜収容所新設 1941秋
3. 1942春最初のユダヤ人移送と大量殺害の開始
4. 1942夏：コンクリート製巨大クレマトリウムの建設開始
5. 携帯品略奪と身ぐるみ剥奪
6. 巨大クレマトリウム運転開始 1943-3
7. 労働力の絶対的不足と囚人の労働配置 1942/43
8. 収容所構造の再編 1943秋
9. 「ハンガリー作戦」と囚人労働力積み替え地への機能転換
10. 最末期収容所体制と全面的敗退による「死の行進」

おわりに——アウシュヴィッツ収容所複合体の撤去

はじめに

第三帝国の「本当の戦争犯罪が行われたのはほかでもない、東部戦線だ。そこにはアウシュヴィッツをはじめとする死の収容所がずらりと並んでいたのだから」(チョムスキー [2004] 189)。確かに、アウシュヴィッツ-ビルケナウ強制収容所・絶滅収容所こそは、ナチズムのユダヤ人殺戮の一つの中心であった。全ヨーロッパから100万～110万人のユダヤ人が1942年から44年までにここに連行された。アウシュヴィッツの犠牲者のうちほぼ90万人が到着後ただちにガス室で殺害された。

だが、アウシュヴィッツ以外の、すなわち全体で約600万人とされるユダヤ人犠牲者（永岑 [1994] 109）の80%以上は、どこで、どうして、どのように殺害されたのか？

アウシュヴィッツの概念は今日、アウシュヴィッツの真実が戦後裁判や被害者の多様な証言類、膨大な研究の成果として、たとえばアウシュヴィッツ裁判の法廷証言などを基にした最新の啓蒙的小説でも（ヘス [2021]）、人類的犯罪の隠喩とさえいわれるほどになっている。

しかし、犠牲者の数ではアウシュヴィッツ以外の方がはるかに多い。500万人近いユダヤ人が、アウシュヴィッツ以外で犠牲になった。その中で、なんといっても多いのはソ連各地の100万人以上のユダヤ人犠牲者であった。すなわち、ナチス・ドイツが侵略して占領したソ連においてであった。そこでは射殺が主たる方法であった。幼子を含む多くの射殺現場写真が示すように、その残虐性はガス室以上ともいうべきであった。射殺隊員の多くが精神に異常をきたした。

しかし、実は数の上では総督府の三つの絶滅収容所の犠牲者の方がはるかに多かった。総督府に課せられたユダヤ人問題の「解決」は、290万人に上った（永岑 [1994] 109）。総督フランクは1941年末、ナポレオンの壊滅的敗北を連想させる第三帝国最初の「冬の危機」のなかで、自分の領域内のユダヤ人を何処かへ連れて行ってほしいと、ベルリン中央に総督府領内のユダヤ人問題の「解決」を求めるに至った。だが、「お前の領内で始末しろ」と突き放された。結果的に総督府ユダヤ人のほとんどはフランクの意を受けた、42年1月のヴァンゼー会議における総督府次官ビューラーの要請に従い、会議から一年以内にラインハルト作戦¹で殺害された。その方法は、絶滅収容所におけるエンジン排気ガス（一酸化炭素）によるものであった。したがって、アウシュヴィッツのみが特筆されるとすれば、そ

¹ ラインハルト作戦の三つの絶滅収容所（ベウゼッツ、トレ布林カ、ソビボル）の位置は本稿末尾の地図を参照されたい。出所：マーチン・ギルバート『ホロコースト歴史地図』滝川義人訳、原書房、1995、217。

こには歴史像のゆがみがあるといわざるを得ない。そこで拙著『アウシュヴィッツへの道』(横浜市立大学新叢書13, 春風社, 2022)で、アウシュヴィッツ以前にアウシュヴィッツ以外(ソ連や総督府)で強行された体系的殺害への道筋と具体像を第三帝国の膨張政策・戦争政策との関連・推移に力点を置きつつ、最新の本格的史料集に依拠して再検証を行った。

アウシュヴィッツで青酸ガス(ツィクロンB)により殺害されたのは、圧倒的多数が西ヨーロッパ各国とハンガリーから強制連行されたユダヤ人であった。総督フランクは、ドイツに併合されたポーランドの地域からのユダヤ人についてさえ総督府に押し付けられることに最初から反対し、受け入れに抵抗していた。彼の立場からすれば、総督府には外部からユダヤ人を受け入れる余地などなかった。ハイドリヒ、その上司ヒムラーは、西ヨーロッパ各国や中欧・バルカンからのユダヤ人のほとんどを総督府領外で「解決」することになった。ユダヤ人を「東方への移住」、「東方への疎開」の名目のもと、ドイツ国鉄・東部鉄道およびドイツ占領下各国鉄道を使って連行(鳩澤 [2021])したが、それを組織したのは、ヒムラー・ハイドリヒ指揮下の親衛隊・警察機構であった。その実務はユダヤ人移送担当課長アイヒマン、すなわち戦後長く戦犯として追跡されてもお確信的国民社会主義者であり続けた(シュタングネト [2021])「重要人物アイヒマン」が各地の親衛隊・警察と連携して遂行した。

ヒトラーは1941年3月、対ソ攻撃計画に集中するため戦時中ユダヤ人移送の中止を命じていた。8月初めになってもゲーリングの署名をもらったハイドリヒの全ヨーロッパ的移送準備案(7月31日付)を拒否した。しかし、8月後半以降、ベルリンやハンプルクなどドイツ主要都市への空襲は第三帝国の面目を失墜させた。ゲッベルスをはじめとする各地のナチ党大管区指導者からはユダヤ人追放要求が噴出した。9月になるとヒトラーは態度を変えざるを得なくなった。戦時中にもかかわらず、ユダヤ人移送を開始することが「総統のご希望」となった。だが、たとえ臨時的緊急避難的措置としても、移送されたユダヤ人を受け入れる余地は、東部・ソ連占

領地域にはなくなっていた。11月、ラトヴィアのリガに移送されたユダヤ人の場合、「ベルリンからのユダヤ人は射殺せず」とのヒムラーの命令も間に合わず、射殺された。都市リッツマンシュタット（そのゲットー）は受け入れを求めるアイヒマンとそれを拒否する現地の治安当局・親衛隊幹部が激しく衝突する舞台となった。結果、41年12月はじめからリッツマンシュタット（ウッチ）郊外クルムホーフにおける移動型ガス室（ボックス型自動車排気ガス）による「安楽死」殺害が始まった（永岑 [2007]）。連合国の戦略爆撃の拡大（フリードリヒ [2011]）は、西部戦線地域のユダヤ人排斥＝追放圧力を高めた。ユダヤ人を「西方から東方へ櫛削る」（ヴァンゼー会議議事録）追放の荒波を受け、42年春からアウシュヴィッツ・ビルケナウの農家改造施設においてツィクロンB（青酸ガス）によるユダヤ人殺戮が本格化していく。

しかし、42年につぎつぎと建設され、大量ガス殺（排気ガスCOによる）がおこなわれたのは、ドイツに併合された地域内に位置するアウシュヴィッツではなく、総督府領内（三つの絶滅収容所ベウゼッツ、トレブリンカ、ソビボルは領内東端に立地）においてである。

ではなぜ犠牲者数で全体の20%ほどでしかないアウシュヴィッツだけが、いまだにユダヤ人大量殺害の代表となっているのだろうか。それには、多岐に渡る理由がある。第一に、証拠隠滅の結果である。1942年に総督府の三つの絶滅収容所で抹殺されたユダヤ人（領内のユダヤ人が中心だが一部ドイツやヨーロッパ各地からのユダヤ人も含む）約200万人の殺害場所と墓穴の完璧な証拠隠滅がおこなわれていたからである。

43年2月約4400の軍服着想のままの大量のポーランド軍将校の死体がスモレンスク近郊で発見され、発掘された。ここで第三帝国の側は「カチンの森」暴露事件を大々的に喧伝することになった。それは、スターリンのソ連による戦争犯罪の摘発であり、格好の宣伝材料であった。ソ連はスターリン、治安機関・ソ連内務人民委員部（NKVD）の命令で40年5月から6月にかけて、ポーランド軍の陸軍将校をはじめ多数の捕虜——知識人、大

学教授、学校教師、実業家、地主、警察官など——を射殺していたのだ。それを大きな墓穴に何層にも積んで埋葬していたのである（ザスラフスキー [2010]）。ソ連はこの犯罪を否定し、むしろ第三帝国の犯罪だと喧伝した。戦時下の宣伝合戦の常とはいえ、真実の検証を行うのは難しく、ソ連が自らの犯罪を認めたのは、ようやく冷静体制崩壊が迫った時期、ゴルヴァチョフ時代になってからであった（VEJ 11:41f）。

スターリングラード敗北、その後のクルスクでの史上最大の戦車戦における敗退に加え、第三帝国の軍事的劣勢下、収容所囚人の反乱・逃亡（ヴィレンベルク [2015]）さえ発生する事態となった。ゲッベルスと第三帝国宣伝機構は「カチンの森」の犯罪の摘発を大々的に活用し、墓穴・死体の写真などをもとに国内外にソ連犯罪を宣伝した。まさにその背後で、第三帝国は自らのユダヤ人殺戮については組織的に証拠隠滅を図ったわけである。43年3月から大々的に特別処理部隊1005（Sonderkommando Blobel）を投入し、ユダヤ人を酷使して死体を掘り起こし、焼却した。その結果、43年11月にはそれら絶滅収容所・墓穴が完全に地上から抹消されてしまった（VEJ 9:40）。この完璧な証拠隠滅——それを必然化し可能にした戦況・前線の状況——こそが、三つの絶滅収容所が忘却されてきた第一の理由であろう。

絶滅収容所が完全に地上から抹消されてしまった。この証拠隠滅——それを可能にした戦況・前線の状況——こそが、三つの絶滅収容所が忘却されてきた理由であり、それまでに総督府ユダヤ人の殺害をほぼ終了していたことも、その前提にあった事情であろう。

それに対して、アウシュヴィッツでは市の郊外ビルケナウに建設されたコンクリート製クレマトリウム（火葬場——ガス室と焼却炉——）が戦争末期まで稼働していた。44年11月にヒムラー命令で爆破されても、そのコンクリートの残骸や大量殺害の証拠がはっきりと残った。この明確な証拠が第二の理由であろう。

さらに、この収容所の巨大な複合的構成は、絶滅収容所（ベウゼッツ、

トレ布林カ、ソビボル）のようにもっぱら大量殺害だけに使われたのとは違って、その存在の期間、以下で見ていくように、戦局に応じてさまざまな機能に使われ、関係した人間の数が多かった。囚人として、親衛隊収容所管理部要員として、警備員その他の職員として、関係企業社員、民間労働者あるいは近隣住民などとして、殺害事件に接触した人間の数が多かった。そして部分的にはすでに戦時中に、しかし戦後のたくさんの報告を見て、大量殺害の犯罪を確信した人の数が多かった。アウシュヴィッツでは第三帝国の全ヨーロッパからの多様な犠牲者集団が出会っていた。アウシュヴィッツには全ヨーロッパからのユダヤ人以外に、多様な非ユダヤ人囚人もいた。70000人から75000人のポーランド人、23000人のシンティとロマ、15000人のソ連捕虜、10000人から15000人のチェコ人、白ロシア人、ユーゴスラヴィア、フランス人といった非ユダヤ人の囚人は、しばしば抵抗運動活動家として、さらにはドイツ人やオーストリア人も政治的囚人として、いわゆる職業犯罪者あるいは反社会分子ならびに同性愛者として、囚われていた（VEJ 16:13）。

このように多様な異質の囚人群から成っていたが、アウシュヴィッツは最大の犠牲者集団、すなわちユダヤ人と結び付けて理解されてきた。ベウゼッツ、トレ布林カ、ソビボルが1943年の間に閉鎖された（末尾地図参照）後では、アウシュヴィッツがユダヤ人に対する体系的大量殺害の唯一の場所となっていたからでもある。そこではユダヤ人が、技術的に完璧化されていった殺害施設の実験と経過を踏まえて、高速で最大限の効率性で殺害された。

方法的なことを一言。本稿のタイトルにも掲げたことであるが、「アウシュヴィッツ」の歴史的意味を理解しようとするれば、独ソ戦から世界大戦への転化、米英ソとの総力戦の死闘、その泥沼化と人的物的諸資源の枯渇の諸相、第三帝国の絶望的敗退過程と全面的敗北の冷徹なダイナミズムの中にアウシュヴィッツの具体的諸事象を位置付けていく必要がある。

1. 多機能複合施設としてのアウシュヴィッツ 1940-41

1940年、アウシュヴィッツ（ポーランド語でオシフィエンツィム）は、ポーランド人政治犯収容所として設立された。当初、「ほとんどの囚人は知識人層出身」（VEJ 16/2）であった。この時点ではこの収容所が第三帝国のユダヤ人大量殺害の中心に発展していきだろろうなどとはまだ見通せなかった。アウシュヴィッツは主としてポーランド人とポーランド・ユダヤ人の住む工鉱業地域に位置した。その所在地は、この地域の経済的ポテンシャルを放棄したくなかった第三帝国がポーランド奇襲攻撃後にドイツに併合し、オーバーシュレージエン州に編入した地域にあった。

40年前半、ポーランドのエリートと抵抗闘士の大量逮捕後、地域のゲシュタポ監獄は非常に過密になった。そこで、占領者は集中的な収容場所を探すことになった。まもなく、アウシュヴィッツ市にある旧兵舎が適当なものとして見つかった。交通連絡が良好で、インフラストラクチャー、基礎的な経済的条件も開発され、防衛上もいい位置にあった。新しい集中収容所はさしあたり、一万人の囚人を予定していた。40年5月、最初のドイツ人囚人30人がベルリン郊外ザクセンハウゼン収容所からアウシュヴィッツに移された。彼らは特に機能囚人（Funktionshäftlinge）として強制収容所支配機構の末端に組み込まれた。40年6月14日、728人のポーランド人を乗せた第一移送列車が近くのタルヌフ（Tarnów）の監獄からやってきた。年末までに7879人の囚人がアウシュヴィッツで登録された（VEJ 16:14）。

収容所司令官に任命されたルドルフ・ヘス（ヘス [1999]）は、この収容所を収容場所としての機能以上に活用しようと計画した。収容所を取り囲むかなり大きな土地を農業目的で手に入れることにした。親衛隊^{ライヒ}全国指導者ヒムラーの最初の訪問（41年3月1日）の後、収容所の周囲にいわゆる親衛隊関係領域が設定された。その領域を面積40平方キロにまで拡張していった。この領域は43年6月からは自立の行政区域として民政当局の監督から外された。ここに園芸、育種場、養鶏養魚の広大な農業実験セン

ターが創られた。囚人は、しばしば素手で、あるいは粗末な道具で下水設備、堤防、実験農場や貯水場を作った。それらは不断に拡大された（VEJ 16:14）。

こうしたことは、もはや単に治安警察的関心からだけではなく、経済的利害関心からも、追い出されたこの地域住民に広範な諸結果をもたらした。アウシュヴィッツ（オシフィエンツィム）市は戦争前、住民14000人だった。そのうち約半数がユダヤ人だった。ドイツ権力者は町のユダヤ人住民を1941年3月と4月にオーバーシュレージエン州最東端にある三つの町フシャヌフ（Chrzanów）、ソスノヴィエツ（Sosnowiec）、ベンジン（Będzin）の一区画に移住させた。それらの区画は42年秋からゲットーとして閉鎖された。親衛隊管轄下域内に土地を持つポーランド人家族はアウシュヴィッツ旧市街ないし総督府に移住させられるか、あるいはドイツ内地の労働配置に連行された。彼らの家屋敷は家具もろとも親衛隊が獲得した。さらに、41年はじめ、イ・ゲ・ファルベン工業株式会社——25年に8つのドイツ巨大化学企業の合同で創設された当時世界最大規模の会社——が人造石油と合成ゴム（ Buna ）の製造工場を近接のモノヴィッツに作ることを決めた。アウシュヴィッツ市は今やドイツ人労働者の入植地となった。ここは、「東方植民」構想——東方に「生存圏」を拡大するヒトラー、ヒムラーなどの基本戦略、後に東方全体計画に総括——の枠組みのなかで、この地域のゲルマン化の模範となるべきものとされた。その建設推進はポーランドのユダヤ人と非ユダヤ人のさらなる追放をもたらした。さらにアウシュヴィッツ強制収容所は、政治犯拘置の機能の他に、別の諸機能も持つことになった。40年11月からは特別法廷で死刑判決を下された人々の裁判と処刑の場所とされた。カトヴィッツ国家警察署の即決裁判は何千もの死刑判決を下し、ここで執行した（VEJ 16:14-15）。

41年7月中頃以降には、いわゆる労働教育囚人もアウシュヴィッツ強制収容所に入れられた。彼らはポーランド人の強制労働者であった。彼らは労働配置された経営から反抗的態度、労働拒否あるいは逃亡の企てが警察

に通報され、その地のゲシュタポにより一時的に収容所送致とされた人々だった。アウシュヴィッツの労働教育収容所は最初、市内基幹収容所のいくつかのブロックに置かれた。43年1月からはイ・ゲ・ファルベン工場の稼働によりモノヴィッツ収容所に置かれた。囚人は普通、遅くとも56日以内に釈放されることになっていた。しかし、実際にはこれが守られなかった。彼らの生活条件は収容所の他の分野と全く違わなかった。釈放に際しては、収容所の出来事を何も外に知らせないことを文書で約束させた (VEJ 16:15)。

アウシュヴィッツの生活諸条件は、1940年から41年にすでに「非常に殺人的」であった。囚人は「最高度に厳しい天候でもマントや帽子なしに連行された」。41年末までに到着した約35000の囚人のうち、半数以上が飢餓、虐待、病気、疲弊で、また頻繁な射殺によって死去した。しかし、41年末まで、ユダヤ人の数は1300人と比較のごくわずかであった。この時点ではまだユダヤ人強制収容の場所ではなかったのである。確かにユダヤ人として登録された囚人は、特別な嫌がらせにさらされた。だが、この時にはユダヤ人に対する狙いを定めた大量殺害行動は存在しなかった。彼らが死んだのは、食料栄養不足によるものであり、あるいは親衛隊の個人的暴力行為によってであった (VEJ 16/2)。

2. ツィクロンB実験と戦時捕虜収容所新設 1941秋

バルバロッサ作戦発動によるソ連攻撃と急速に拡大する占領地・陸軍後方地域におけるユダヤ人大量射殺の開始で、1941年夏、体系的なユダヤ民族殺戮への決定的一歩が踏み出された (永岑 [2021b], [2021d])。41年末までに四つのアインザッツグルッペ (親衛隊・警察の特別出動部隊) がドイツ国防軍の進撃の後、征服したソ連各地ですでに50万人以上のユダヤ人を射殺していた。8月以降、さまざまのところで新しい殺害方法が試され、殺害手段としての毒ガスが試された。

一酸化炭素ガスの方法はすでに39年9月以降、精神病患者などに対する約8万人の「安楽死」殺害（T4作戦）で使われた方法であった。41年、ナチスはその一酸化炭素利用の殺害作戦を14f13という暗号名で強制収容所の労働不能になった囚人や望ましからざる囚人に拡大した。アウシュヴィッツの575人の囚人もこの対象となった。彼らは41年7月、ドレスデン近くのピルナ-ゾンネンシュタインの「安楽死」施設から移送されてきて、ここで殺害された（VEJ 16/16）。

【害虫駆除剤ツィクロンB = 青酸ガス】

親衛隊は1941年夏、アウシュヴィッツでも毒ガスによる殺害を実験した。親衛隊少佐カール・フリッチュの頭に41年8月、収容所にあるシラミ等害虫駆除剤ツィクロンBを人間の殺害に投入しようという発想が浮かんだ。ツィクロンBによる最初の大規模殺害作戦は、41年9月初めに基幹収容所（アウシュヴィッツ第一）で行われた。ポーランド抵抗運動が掴んだ情報では、「9月5日と6日、約600人のソ連人捕虜——その中には赤軍の政治将校もいた——と約200人のポーランド人が営倉に詰め込まれた。そのあと営倉が密閉され、ガスで殺された。死体はクレマトリウム（火葬場）に運ばれ焼かれた」（VEJ 16/3）。

あるカトリック聖職者の秘密通信によれば、彼は41年9月はじめ、病院の弱った患者の選別（約250人）とガス室に追い立てられる患者を見た。彼は、ダンテの描くような「地獄の責め苦」、ガス室に閉じ込められた患者の「ぞつとする叫び声」を記録にとどめた（VEJ 16/4）。この時、彼らがガス殺されたのは基幹収容所のブロック11の営倉であった。約600人のソ連人捕虜は41年7月から政治役員・コミニスト殺害のためのコミッサール命令によってアウシュヴィッツに連行された者だった（VEJ 16/16）。

その後何か月も、いくつもの作戦で同じようなやり方で戦時捕虜と労働不能囚人が殺害された。ツィクロンBは親衛隊に「効率的な殺害手段」だと証明された。1941年秋には、40年8月に稼働開始していたクレマトリウ

ムの死体置き場がガス殺の場所に使われることになった。先にも触れたが、ブロック11の死体をそこからかなり離れたクレマトリウムに搬送することは人目を引いた。それを回避するためであった（VEJ 16/77）。

元囚人や元親衛隊要員の証言によれば、すでに1941年から42年にかけての冬、戦時捕虜と労働不能者に加えてユダヤ人も基幹収容所で殺害されたという。しかし、同時代のドキュメントには、アウシュヴィッツがすでに1942年以前にユダヤ人殺害場所に利用されていた証拠はない。アウシュヴィッツ収容所司令官ルドルフ・ヘスが戦後裁判で、すでに1941年夏にアウシュヴィッツをユダヤ人迫害の中心にするという決定があったと主張したが（ヘス [1999]）、それは歴史研究では否定されている（VEJ 16:17）。

1941年秋の収容所拡張計画は、ソ連戦時捕虜収容のためであった。ユダヤ人の大規模な収容のためではなかった。41年9月後半、ヒムラーは国防軍最高司令部（OKW）と10万人規模のソ連人戦時捕虜の受け入れで合意した。国防軍と親衛隊がこの時はまだ、「東方植民」計画の包括的建築計画のために、ソ連人の戦時捕虜を投入する方針であった。電撃的ソ連制圧が机上の空論と判明しつつあった9月後半になっても、開戦前から緒戦段階の「勝利の熱狂」がなお彼らをとらえていた。すなわち、ソ連制圧後の東方領土拡大の「計画」がまだ、実現可能性の問題としてとらえていた。また、ルブリン-マイダネクは「東方」に樹立されるべき親衛隊帝国の中

心的な結節点・基地として構想された²。41年7月以降に計画されたこのルブリン-マイダネクの戦時捕虜収容所と並んで、アウシュヴィッツも5万人の戦時捕虜を受け入れることになった（VEJ 16/1）。

彼らを収容するため、郊外のビルケナウに新しい付属収容所を設置することになった。この決定が、とりわけ劣悪な生活諸条件の単なる拘留施設であることをやめるプロセスの開始の画期となった。親衛隊は、ビルケナウに前代未聞の規模の収容所建設を計画した。それが後の大量殺害センターとしてのこの場所の機能転換のための前提となった。第三帝国「最初の冬の危機」に向かう戦況、総力戦化といった戦況と構造的転換が、ビルケナウ収容所の機能転換をもたらした。ビルケナウはこの時点ではまだユダヤ人の連行・殺害場所として予定されていたわけではなかった（VEJ 16:18）。

1941年10月、さらにおよそ一万人のソ連戦時捕虜がアウシュヴィッツ基幹収容所に割り当てられた。彼らが41年/42年の冬の間に、ビルケナウに広大な収容所を建設した。親衛隊は、最初から戦時捕虜の高死亡率を想定

² ソ連戦時捕虜を大規模に収容し、その労働力を建設予定の親衛隊工業複合体と親衛隊中央諸官庁の設立のために使おうと企図していた。しかし、捕虜は国防軍収容所での高死亡率でほとんど活用できなかった。ヒムラーの諸計画の異常に増殖した規模は、独ソ戦に規定された輸送逼迫や建設資材不足で挫折した。並行的に構想されたビルケナウ（アウシュヴィッツ第二）とは違って、マイダネクは暫定的臨時的状态を抜け出すことは一度もなかった。1942年から43年、ここは主として非ユダヤとユダヤのポーランド人の「移住者」およびパルチザン容疑者の強制収容所として使われた。またチェコスロバキアやスロヴェニア、そしてワルシャワ・ゲッターからのユダヤ人が送り込まれた。さらに、絶滅収容所としての機能も加わった。42年9月から12月、ツィクロンBによるガス殺施設が作られたのである。43年10月14日にソビボルで発生した反乱を受け、ヒムラーはトラヴニキなどの労働収容所の全ユダヤ人の射殺を命じた（暗号名・収穫祭作戦）が、ルブリン-マイダネクでも17000～18000人が射殺された。ユダヤ人労働班が死体焼却・埋葬をさせられ、作業終了後に射殺された。犠牲者総数は少なくとも20万人で、そのうちユダヤ人は6万から8万人だった。Enzyklopädie des Nationalsozialismus, hrsg. v. Wolfgang Benz, Hermann Graml und Hermann Weiß, Berlin 2000, 573.

し、41年10月にエアフルトのトプフ社(Firma Topf & Söhne)の技師クルト・ブリューファーと死体焼却炉について交渉した。この会社はすでに基幹収容所でクレマトリウムを建設していた。その実績を踏まえて第二のもっと大きな火葬施設を建設する事案であった。この第二クレマトリウムも、最初は基幹収容所の既存クレマトリウムのすぐそばに建設されることになった。ほかの囚人に比べてさらに劣悪な食糧供給により、ソ連戦時捕虜のほとんどが死亡した。42年3月はじめに新しくビルケナウに設立された収容所に引っ越したのは、わずかに945人とどまった (VEJ 16:18)。

3. 1942春最初のユダヤ人移送と大量殺害の開始

1942年1月、アウシュヴィッツをユダヤ人移送の目的地にすることになる政治的諸決定が下った。41年10月以降ドイツ本国から移送されてきたユダヤ人が、今まで以上に諸強制収容所内の労働配置に割り当てられることになった。これを可能な限り効率的に推進するため、さまざまな親衛隊官庁が親衛隊管理本部にまとめられた。42年1月、ヴァンゼー会議で、ラインハルト・ハイドリヒと諸国家官庁の次官、官僚と親衛隊幹部がユダヤ人移送の権限やロジスティックを調整した。この会議でも、被連行者たちの労働配置がテーマになった。しかし議事録が示すように、その際、労働配置が普通は死をもたらすだろうこと、仮に労働配置を生き延びたとしても、それは「もっとも抵抗力のある部分」を意味するものとして、結局は抹殺することに何の疑いもなかった (ヴァンゼー会議記念館 [2015] 151-153)。

「東方植民」の包括的な諸計画の結果、アウシュヴィッツでは労働力需要が大きかった。同時に、ビルケナウの建設により、囚人の大量宿泊の場所が確保できた。当初、労働配置のために予定された戦時捕虜はその大部分がもはや生存していなかった。1942年2月になって親衛隊建設長ハンス・カムラーの来訪中に、もともと基幹収容所のために計画され41年10月22日に発注された新クレマトリウムの立地をビルケナウの戦時捕虜収容所に移

すことが決定された（VEJ 16/5）。この新クレマトリウムの装備の仕様も変更された。特別に処理能力のある換気装置の諸計画が提出された。これは大型ガス室の備え付け計画を意味した。このクレマトリウムと後に計画された三つのクレマトリウムが完成するまでに、一年以上かかった（VEJ 16:19）。全部完成した暁には、基幹収容所（アウシュヴィッツ第一）のクレマトリウムはクレマトリウムIとなり、郊外ビルケナウ（アウシュヴィッツ第二）のクレマトリウムは、II、III、IVとなる³。

クレマトリウムI（基幹収容所のガス室・死体焼却設備）は、親衛隊の考えでは大量殺害の場所としてあまり適していなかった。そばには幾つもの囚人棟があった。近接している囚人用宿舎に犠牲者の叫び声が聞こえてしまうからであった。親衛隊はほかの囚人から見えないように、殺害現場の遮断・封鎖も必要になると見た。しかし、基幹収容所でそんなことをすれば、収容所の日常は大きく影響を受けてしまう。その上、基幹収容所の焼却炉の処理能力に限界があった。親衛隊は短時間のうちにガス室で約700人を殺害した。しかし、死体焼却には何日もかかった。さらに埋葬用の壕を掘るのは、居住者・居住棟が密集している基幹収容所内では難しかった（VEJ 16:19）。

基幹収容所クレマトリウムを殺害場所として使うのをできるだけ早く中止するため、収容所司令官へは、遅くとも1942年3月以降、ビルケナウ敷地内の二つの没収農家を暫定的なガス室に改造した。それらを、ブンカーI、ブンカーIIと名付けた。ブンカーIは壁の色が赤みがかったので「赤い家」と呼ばれた。これは、42年3月23日から、病気や労働不能の囚人の殺害のために使われた。親衛隊は、この日800人を鞭で追い立て、そこに閉じ込め、ガス殺した。42年6月、ブンカーII、別名「白い家」には、同時に1200人まで詰め込まれた。親衛隊はブンカーを最初は収容所の病人や

³ 基幹収容所（アウシュヴィッツ第一）とビルケナウ（アウシュヴィッツ第二）のクレマトリウムの位置は、本稿末尾の地図を参照されたい。出所：VEJ 16、表紙裏。

消耗した囚人の——親衛隊医師が定期的に病院棟で実施した選別の結果により——殺害施設として利用した（VEJ 16/12, 36）。

ユダヤ人に対する体系的殺害作戦の舞台となったのは、42年5月から8月の間で、ブンカーIとブンカーIIは、ポーランド南部のザグビエドブロウスキエ出身の殺害に使われた。この地域のユダヤ人住民は周辺のカトヴィッツ県全域からのユダヤ人追放によって41年冬までに約97000人に増えていた。彼らの生計を得るための仕事の基盤はドイツ人が破壊していた。生活維持のためには、工場、アウトバーン建設その他の強制労働者収容所での強制労働しかなかった。たくさんの家族が、若い、労働能力のある家族の強制収容所送りによって、扶養者を失った。そして生活保護に頼らざるを得なくなった。すでに41年冬、労働配置されないユダヤ人住民は強制的に移住させられるそうだという噂が流れていた。42年5月カトヴィッツのゲシュタポは、労働場所を証明できない市周辺の人々をアウシュヴィッツに移送し始めた。42年8月半ばまでに、特にザグビエドブロウスキエの都市ベンジンやソスノヴィエツから、しかしこの地域のもっと小さな町々からも、約34500人がビルケナウのブンカーIとブンカーIIに送られ、そこで例外なく殺害された（VEJ 16/12, 36）。

それと並行して1942年3月末から、^{ライヒ}帝国保安本部がスロヴァキアとフランスからアウシュヴィッツへの移送を組織した。その中には初めて婦人も含まれていた（VEJ 16/6, 8）。1000人の非ユダヤ人女性の最初の移送者は、ドイツ東部ブランデンブルク州のラーフェンスブリュック女性収容所の囚人であった。そのうちの相当数を機能囚人として、すなわち、ユダヤ人その他の監視等の役割で、収容所統治の支配の末端に位置づけて活用することを予定していた。彼らがアウシュヴィッツに到着したのは、42年3月26日であった（VEJ 16:20）。

スロヴァキアとフランスのユダヤ人男女は収容所に収容され、登録された。彼らは、あらかじめ「東方植民」のための労働力として想定されていたからである。この観点から、移送編成担当の親衛隊・警察部署は、特に

労働能力あるものを集めるように指示されていた。これに対して、スロヴァキア政府の関心は、全家族を送り出すこと、それによって扶養されない家族——スロヴァキア政府の負担になってしまう——が一人も残らないことにあった。いずれにせよ、全ユダヤ人の追放が計画された。移送に一定割合の非労働能力ユダヤ人を含むことが合意された。42年4月29日、スロヴァキアからの第一家族移送列車が到着した。プラットホームの貨物積み下ろし場で親衛隊はただちに1004人の選別を行った。労働力として利用できないものとして281人をより分け、この選別に引き続いて、ガス室で殺害した。残りの者——その中には56人の未成年者がいた——を親衛隊は囚人として登録し、収容所に収容した。囚人の振り分け・選別方法を親衛隊のこの時以降、放棄することはなかった。移送列車が最初は時折、しかし42年7月からは規則的に振り分け措置の下に置かれた。この振り分け場所は、44年5月末までアウシュヴィッツの元貨物駅の「旧ユダヤ人積み替え場」と後に称されることになる番線で行われた。ここは収容所の外にあり、ガス室から約二キロ離れていた。「アウシュヴィッツ・アルバム」の写真で知られ、今日ビルケナウで見学できる積み替え場は、44年5月以降にはじめて、振り分けに利用された（VEJ 16:20）。大量のハンガリー・ユダヤ人殺害を捌くためであった。

1942年夏からは規則的にフランス、オランダ、ベルギーからの移送列車がビルケナウに到着した。収容所親衛隊は到着者を最初、性別に振り分けた。子供は女性のグループに割当てた。次の選別の段階で親衛隊の収容所医者が決定に参加し、二つのグループをもう一度別々にした。老人、病気、労働不能と見えたものは、一方の側にまとめられた。健康でたくましいと見られたものは、別の側にまとめられた。生か死の決定は、選別の間に親衛隊が下した。しかし、その基準ははっきりせず、しばしば恣意的なものだった。老人、妊婦、子供、外部から身体的に欠陥があるとわかる者、幼児を連れた者などは、労働配置に選ばれるチャンスが特にわずかだった。ベルリンの女性医者の回顧によれば、やり手の老囚人は、子供を母親から

引き離し祖母に押し付けた。若い母親が労働配置に選ばれるように。しかし、子供から引き離されたくない母親たちは、子供をひったくって取り戻した。彼女たちは知らずにか、あるいはしばしば知っていても、死を選んだ。それは、「心臓を引き裂くような」光景であった。別のウィーンの医者
の回想でも、殺された婦人の割合は初めから男性の割合よりもはるかに大きかった。子供連れの婦人のもだえ嘆くさまを見ないで済むように、完全に元気な若い婦人でさえ、子供と一緒になら、仮借なくガス室送りとなった (VEJ 16:21)。

家族の分断は、到着者にパニックを引き起こした。だが、多くの者は親衛隊の説明、「弱いもの、病人、子供は分離される。自動車で収容所に行くためだ。元気なものは徒歩で行かなければならない」を信じた。家族と二度と会わないことなど、分離の瞬間には多くの者は知らなかった。普通、数日のうちに、煙が登る煙突やしばしばあけすけな他の囚人の発言から、本当のことが分かった (VEJ 16:21)。

登録された男性囚人は、通し番号の収容所ナンバーを受け取った。最初のユダヤ人囚人は、1942年3月30日、27533の符号をつけられた。婦人たちには42年3月の女性部設置により、新ナンバー・シリーズがはじめられた。このシリーズは2年間、ユダヤ人と非ユダヤ人の女性囚人に同じように適用された。44年5月13日からユダヤ人囚人（男女）に独自の新しいナンバー・シリーズが付けられた。活字Aが数字の前に置かれた。男性がA-20000に達した時、44年7月31日からBナンバーが付けられた。登録囚人にはそのナンバーが肌に入れ墨された。それは死体の身元確認を簡単にするためだった。1944年夏、収容所が受け入れたたくさんのいわゆる「通過ユダヤ人」は、ほかの収容所へのさらなる移送が予定されていた。彼らはアウシュヴィッツ管理部によって登録されなかった。アウシュヴィッツに連行された100万人以上のユダヤ人のうち、約20万人が登録され、ナンバーを付与された。登録後、ユダヤ人囚人はビルケナウのバラックに入れられた (VEJ 16:21)。

死と決められた人々は貨物自動車でビルケナウのブンカーIとブンカーIIに運ばれた。1942年4月からユダヤ人囚人から編成されたゾンダーコマンド（特務班）が殺害を補助した。彼らは人々を殺害場所に連れて行き、死亡後、金歯や隠し持たれた宝石貴金属類を取り去り死体を墓に埋めた。場所はビルケナウ近隣の小さな森のなかであった（VEJ 16/42）。

4. 1942夏：コンクリート製巨大クレマトリウムの建設開始

1942年初夏、ビルケナウは、労働不能者が殺害される強制労働者収容所から、絶滅センターになった。ここに配置された親衛隊員たちにとって、今やユダヤ人被追放者の体系的殺害が日課となった。親衛隊全国指導者ヒムラーは、彼の業務日誌（ベルリンの壁崩壊・東西冷戦終結後モスクワの秘密文書館で発見）が証明する通り、42年7月17日と18日ビルケナウを視察し、収容所の新しい任務を裁可し、確認した。この時、ヒムラーは、オーバーシュレージェンの大管区指導者フリッツ・ブラッハトと南東高級親衛隊・警察指導者ハインリヒ・シュマウザーと一緒に選別現場を視察し、ビルケナウ・ブンカーIIで行われたオランダ・ユダヤ人の殺害に立ち会った（VEJ 16:22）。

到着する移送列車の数が次第に増え、親衛隊による死体除去が遂行できなくなった。1942年夏、収容所は伝染病衛生上の非常事態に陥った。発疹チフス伝染病が蔓延したため⁴、収容所司令官ヘスは42年7月に収容所ロックダウンを布告した。42年10月まで、収容所敷地内への立ち入りと退出は、外部に労働配置の囚人についても親衛隊関係者についても、非常に制限さ

⁴ 「発疹チフスは結局、集団と貧困の病気だったのだ。…特に都市のスラムやそれに近い環境、つまり栄養の悪い人々が惨めに蝟集している場所では、無数の他の、感染症——結核、赤痢、肺炎などが獲物を奪い合っていた。発疹チフスはほかの多くの感染症よりも速やかな死をもたらした…」ウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史』下、佐々木昭夫訳、中公文庫、2007、111-112。

れた。42年8月、ユダヤ人・ゾンダーコマンドが数百人規模に増員された。彼らはそれまでに大量墓に埋められた死体を掘り出し、まきの山で焼却した。親衛隊は、大型焼却設備の増設に突き進んだ。すでに41年秋に計画されたクレマトリウムは42年7月以降建設中であった。しかし、もっと多くの火葬を実施できるようにするため、親衛隊は42年8月、三つのクレマトリウムの増設を決定した。二つの相対的に小さなクレマトリウムは、のちにクレマトリウムIVとクレマトリウムVと名付けられることになるが、ブンカーIとブンカーIIで殺害されたユダヤ人の焼却のために使われるものとされた。しかし、もう一つのクレマトリウムは、後にクレマトリウムIIIと呼ばれることになるが、すでにこの時点で殺害と死体焼却を統合した施設として、先行するビルケナウ・クレマトリウムIIを手本として計画された (VEJ 16/23)。

クレマトリウム建設に従事するトプフ社の技師フリッツ・ザンダーは新しい最高性能の死体焼却炉を設計した。彼は焼却処理能力増加という点で親衛隊の熱心な支援者であることを証明した。1942年9月、ザンダー技師は4階構造の焼却炉を設計した。この焼却炉では、死体がベルトコンベヤーで運び込まれ、焼却炉の火格子の上に置かれ、すでに燃えている死体が燃料となって次々と焼却が進むようになる設計であった。この設計では、焼却炉がひとたび加熱されれば、追加的な燃料なしに運転継続できるものであった。ザンダー自身、この設計構想の最後に、「このような焼却炉は純粋に絶滅設備とみなされるべきであり、敬虔さなどのあらゆる感情的要素が完璧に排除されなければならない」と記した。そして、「そのような処理を強制するのは戦争に条件づけられた特別の諸事情である」と (VEJ 16:23)。1943年2月にはさらに処理能力を引き上げる輪形炉——レンガ製造に利用されているタイプ——の設計がトプフ社技師とアウシュヴィッツ中央管理部によって作成された。しかしこれは実際に建設されるには至らなかった (VEJ 16/55)。

【囚人労働力利用と収容所の劣悪極まる生活諸条件】

ヴァンゼー会議（1942年1月20日）の確認事項には労働力配置を必要に応じ適宜行っていくというものがあった。42年春、親衛隊経済管理本部の設置により、強制収容所囚人の軍需産業における労働力利用に組織的に道筋が付けられた。そして、ヒムラーと経済管理本部長ポールは次第に強制収容所の全軍需品製造を親衛隊の管理下に置くという野望を膨らませた。

軍需省と産業界も対米宣戦布告で世界戦争に突入した総力戦下の労働力不足の厳しい現実（永岑 [1988], [1991], [2010], [2013]）から、強制収容所囚人の労働配置に大きな関心を持っていた。しかし、決して製造プロセスの親衛隊経済管理本部への移譲、主権放棄を欲しなかった（VEJ 16:23）。軍需省・産業界と親衛隊、その経済管理本部との間には、軋轢があった。

42年9月、軍需大臣シュペーアと経済管理本部長ポールなど親衛隊幹部との調整会談が開かれた。議題は、1. 「東方移住」のためのアウシュヴィッツのバラックの増設、2. 強制収容所による大規模な軍需課題の引き受け、3. 強制収容所による空襲被害支援であった。会議の結果、第一の点については、シュペーアはアウシュヴィッツのバラック収容所の拡大を親衛隊側の要望に従い、完全な規模で承認した。ヨーロッパ各地から「櫛削られて」来るユダヤ人の「東方疎開」、「東方移住」に応えるバラック需要に見合うものとして、増設を認めた。シュペーアはアウシュヴィッツ-ビルケナウの拡張計画——これは金融援助1370万ライヒスマルクを予定——に同意したのである。この資金は「東方移住」を名目とする新しいバラックとインフラストラクチャー拡充の建設資金であった。この建設規模は、約300棟のバラックの設置を含み、しかも、必要な供給設備や補完設備の設置も含むものであった。必要な原料は42年第四四半期、43年第一、第二、第三四半期に配分されるものとなった。この追加的建設プログラムが実施されると、アウシュヴィッツで総数132000人の労働力の宿泊が恒常的に必要となった（VEJ 16/30）。

第二の点について全会議参加者は、収容所に存在する労働力が今後は軍

需課題に大規模に投入されなければならないという点で合意した。ポールは、それを実現しようと「ずっと努力してきた」が、これまで挫折してきた。この会議でもシュペーア軍需大臣自身の周辺に抵抗があることを「発見した」。ポールは、経済管理本部による大規模なまとまった軍需課題の引き受けに固執できなかった。囚人を収容所境界外において生産目的で提供するのとは例外的事例の場合のみだというそれまでの原則を放棄せざるを得なかった。この決定は外部収容所システムの発展にとって大きな意義を持った。シュペーアは、短期的にさしあたり5万人の労働能力あるユダヤ人の配置を既存経営に宿泊可能性とともに提供しようとしていた。この目的のために必要な労働力は、第一にアウシュヴィッツで「東方移住」から「すくいとる」ことになると経済管理本部は考えた。その結果、「東方移住」に定められた労働能力あるユダヤ人は、その旅行を中断し、軍需労働を提供しなければならないことになった。経済管理本部が引き受けられることができる比較的大きな軍需課題は、ヴァイマル-ブーヘンヴァルトでのカービン銃生産、ハンブルク-ノイエンガンメにおけるピストル製造、そして、アウシュヴィッツにおける3.7センチ高射砲製造であった。これらは、会議当時、順調に進展していた。フル回転するようになれば、軍需生産計画に相当な貢献をするはずであった（VEJ 16/30）。

しかし、それを阻害する事情、すなわち、アウシュヴィッツ-ビルケナウ収容所の状態が維持不可能なまでに悪化していることが判明した。それは43年5月の軍需省と収容所との合同会議で明らかになった。主要な難問は、水、電気、排水の3つのであった。この間にビルケナウ収容所では必要な資材割り当てが「ますますわずかになって」いた。その結果、通常の計画は断念する必要がある。さまざまな伝染病の危険によって、既存設備の改善のためだけでも、「特別措置を執る」ことが絶対に必要になった。巨大な収容所領域のための水の供給システムは欠如していた。繰り返し発生する伝染病は、軍隊に対する危険や労働力磨滅だけではなく、近隣工業地域にとっても大きな危険を意味した。収容所には資材割り当て不足で住

宅も衛生も、「もっとも原始的な基盤さえも保障されていなかった」。そこで、軍需工業のための、収容所隣接の大きな農業のための、合成ゴム生産（イ・ゲ・フェルベンの工場）のための試験施設などに必要な労働力が不足した。それだけではなく、広い工業地域にとっての伝染病の蔓延の危険は、「囚人と民間労働者との接触によって」生じていた。最も必要なシラミ駆除設備のためにさえ、資源割り当てが欠如していた。伝染病との体系的な闘いで成功を収めることは「おぼつかない状態」であった。以前、囚人数がわずかだったときですら、すでに衛生状態は劣悪だった。新来者が多くなり、10万人以上になって、伝染病勃発の危険は、見通しが効かないほどに大きくなった。「もはや到底責任を負えない状況」になっていた（VEJ 16/70）。こうした状況から、軍需産業に収容所囚人の労働配置を求めるシュペーアの要求は、一方ではアウシュヴィッツ-ビルケナウの工業用建築計画に高い緊急性を与えた。しかし、同時にそれは他方で、絶滅施設の増設も強力に推進することになった。

ブンカーIとブンカーIIでの殺害作戦の開始（1942年春）以降、親衛隊は、基幹収容所旧クレマトリウムの死体置き場でのガス殺を終わりにした。ここはもっぱら囚人射殺場所として利用した。ただ、ここでのガス殺の最後は42年11月であった。ユダヤ人囚人アルター・ファインジルバーはこのときの体験を45年4月16日にアウシュヴィッツにおける「ヒトラー犯罪調査委員会」の尋問に答えて述べている。ここでの最後のガス殺犠牲者は、42年夏からビルケナウで大量墓除去＝証拠隠滅に投入されたゾンダーコマンドの囚人であった（VEJ 16/38）。

1942年8月、経済管理本部はドイツ国内の収容所のすべてのユダヤ人をアウシュヴィッツに引き渡すことを命じた。対象は約1600名のユダヤ人であった。この作戦が実施されるとドイツ内にある収容所は「ユーデンフライ」（ユダヤ人が居なくなる）であった。その代わりはほかの収容所から引き抜いたポーランド人、ウクライナ人その他の囚人がユダヤ人の代わりに仕事を担わせることとされた（VEJ 16/34）。問い合わせを受けたアウシュヴィッ

ツの回答は、ポーランド人については「熟練労働力不足」を根拠に引き抜きに応じられないというものだった。反対にユダヤ人のアウシュヴィッツへの引き渡しについては異論なかった (VEJ 16:176)。その後の何週間かのうちに約1500人の囚人がアウシュヴィッツに移された。その相当数が新設外部収容所モノヴィッツに割り当てられた (VEJ 16:24)。

1942年12月からは帝国保安本部がドイツとテレージエンシュタット (オーストリア) からのユダヤ人をアウシュヴィッツに移送した。同時に総督府にまだ残っていたポーランド・ユダヤ人のグループが送り込まれた。6週間のうちに、3万人のユダヤ人がツイヒェナウ県と1941年にドイツに併合されたピアウイストクからアウシュヴィッツに連行された。42年12月6日には、ツイヒェナウ県のゲッターから一移送列車が到着した。2500人のうち、406人が労働配置に選別された。彼らの中の一人が、貴重な記録を残すことに成功したライブ・ラングフスであった。彼はゾンダーコマンドに配置された。彼はクレマトリウム III 近くの地中に記録文書を埋めた。ゲッターでの辛苦の雰囲気や連行の恐怖、アウシュヴィッツ到着後の精神状態——彼の妻と子供は到着後即座に殺害された——、そしてガス室における想像を絶する残虐行為について書き残した (VEJ 16/44)。

ラングフスなどが地下に埋めて隠したガス殺・死体焼却現場の暴露の証拠文書は、戦後何度かの発掘と歴史研究者・文学研究者などの解読を踏まえて再現が行われた (チェア/ウィリアムズ [2019], 永岑 [2019])。1942年12月中旬から44年11月までのゾンダーコマンド・ラングフスの極秘活動記録 (VEJ 16/44) も貴重な一次資料だが、ユダヤ人殺戮を行う親衛隊の精神的窮迫を示す残虐性についてそのごく一部のみ以下に紹介しておきたい。

1943年はじめ、地下室(ガス室)にはユダヤ人がぎっしり詰め込まれていた。しかし、一人のユダヤ人少年がまだ外にいた。ある親衛隊伍長が彼に近づき、棒で少年を凄惨に殴りつけた。少年は血まみれになった。虐待された少年はじっと地上に横たわってしまった。しかし突然、立ち上がり、残忍な殺人者の子供の目で黙ったまま見つめた。親衛隊曹長は大声で冷笑的に突然

笑い出し、拳銃を引き抜き、この少年を射殺した。また、親衛隊上級曹長モルは地下室に行こうとしない4人を並んで立たせ、全員と一緒に直線で射殺した。頭をよけたものは生きたまま燃え盛る墓穴に投げ込んだ。いずれの移送列車が着いた時も、彼はベンチの上に立ち、短いスピーチを行った。「今から諸君はシャワー室に行く。その後帰ってきて仕事場に配分される」と。誰かこれを疑うものがいれば、モルは情け容赦なく殴りつけ、暴力的なカオス状態を引き起こした。

1944年夏、200人の若いハンガリー・ユダヤ人が射殺のため引き出された。抵抗の咎で処刑されることになった特別のグループであった。彼らはビルケナウのクレマトリウムIIの敷地で裸にされた。親衛隊曹長ムスフェルトがやってきて、クレマトリウムIIIへ歩かせた。この間60メートルほどの陰の道があり、それは公道からは見えなかった。裸のユダヤ人が別々の方向に行かないように、全コマンドが人垣となった。完全に裸のユダヤ人たちをヒツジのように道路にそって追い立て、警棒で頭を殴った。彼らはコマンド指導者とドイツ人カポに駆り立てられた。彼らは小さな部屋に詰め込まれ、それから一人一人引きずり出され、射殺された（VEJ 16:206）。

ある収容所から疲れ果てやつれたユダヤ人グループが連行されてきた。彼らは屋外で脱衣させられ、一人一人射殺の場に行った。彼らはぞっとするほど飢えていた。命の最後の瞬間にひとかけらのパンをひたすら嘆願した。「たくさんパン」が持ってこられた。彼らの目は飢餓で生気なく曇っていた。しかし、この瞬間、荒々しい炎と荒れ狂う歓喜で燃え上がった。パンを両手でつかみ取った。彼らは階段を下りて射殺場に向かう間、むさぼるように平らげた。彼らは死の方が楽だと思うほど、パンの味わいに酔っていた。このユダヤ人たちはわずか数週間前に家から引きちぎられた人々であった。

1943年夏の終わりごろ、タルヌフからユダヤ人移送列車が一本到着した。この期に及んでも、幻想に頼るものもあった。一人の青年がベンチに上がり、全員に自分に注意するよう呼びかけた。その瞬間、死の沈黙が生じた。「同

胞、ユダヤ人。彼らがわれわれを死に導くと信じてはならない。何千人もの罪のない人間を突然死に導くなどかなえられない。そんな残虐行為、そんなおぞましい殺人がこの世にありうるなど考えられない。そんなことを語る人間はきっと何かそんなことで得をするのだ」と。彼はみんなが完全に静まるまでしゃべった。ガスが投入されて初めて、道徳説教師で良心的な深い確信を持った男は彼のナイーブさを失った。ゾンダーコマンドの心に刻み込まれたこれらの事実も、次の事例と同じく、外にいる親衛隊員は関知しなかったであろう。

1943年の終わりごろ、周辺地域の164人のポーランド人が連れてこられた。そのなかに12人の若い女性がいた。すべて、秘密組織のメンバーだった。一人の若いポーランド人女性がガス室で脱衣させられた人々を前にナチの殺人者と抑圧に抗する短いが燃えるような演説を行った。その結びは、次のことばであった。「われわれは今死ぬのではない。われわれはわが民族の歴史によって永遠化される。われわれとわれわれの魂は生き続け、栄える。ドイツ民族はわれわれの血のために、想像されるよりもはるかに高く支払うことになるのだ。ヒトラー・ドイツの野蛮を打倒せよ！ポーランド万歳！」。続けて、彼女はゾンダーコマンドのユダヤ人に向かって言った。「われわれ罪のない血のための復讐の聖なる義務が諸君にもあるのだ。それを考えよ。同胞に語れ。われわれがはっきり自覚して完全な誇りをもって死に向かったことを」と。ポーランド人は地上に跪き、感動的態度で厳かに祈りをささげた。彼ら是一緒になってポーランド国歌を歌った。ユダヤ人はハティクヴァを歌った。ポーランド人抵抗運動者たちとユダヤ人の共通の悲惨な運命が、この隔絶した場所でさまざまな賛歌を融合させた。さらに彼らは声を合わせてインターナショナルを歌った。その間に赤十字の印をつけた車がやってきた。親衛隊医師がツィクロンBの缶を赤十字印の車で運んだのだ。ツィクロンBが部屋に投げ込まれた (VEJ 16:207)。

1944年の過越（4月8日から15日）。フランスのヴィッテル（フランス北東部ロレーヌ地方ヴォージュ山脈麓の町）から一移送列車が到着した。

それには非常に有名なユダヤ人がたくさん含まれていた。その一人はクラカウ出身のラビ、フリードマン（Reb Mojsze Friedmann）であった。彼はポーランド・ユダヤ人の最高の権威の一人であった。彼は、親衛隊曹長がやってきたとき、ほかのすべてとおなじく脱衣していた。このラビは、曹長に近づき、服の折り返しをしっかりとつかみ、ドイツ語で言った。「お前たち、身の毛のよだつ忌まわしい世界殺人者よ！ユダヤ民族を絶滅することに成功したなどと考えるな！ユダヤ民族は永遠に生き続け、世界史の舞台から決して消え去ることはない。しかし、お前たち卑劣な犯罪者は非常に高いものを支払うことになろう！お前たちは、権力としても独立の民族としても抹消され、消え去ることになろう。復讐の日は近づいている。流された血が警告している。燃える怒りがお前の民族にぶちまけられ、おまえたち野獣化した血を根絶するまで、われわれの血が決して鎮まることはない」と。彼はこれらの言葉を大音量で、周りに響きわたる声でものごいエネルギーで発したとラングフスは記録しているが、このような抵抗の態度は即座に射殺されたはずで、なぜこれだけの言葉を発し続けることができたのか、不思議である。おそらくは、その間ガス室が閉鎖されていたのであろう。

次は1943年末の冬。子供だけの移送列車が来た。彼らはリトアニアのシャウレン（シャウレイ）出身だった。彼らは父親たちが仕事で外出中に家から連れ去られた。コマンド指導者は誰かを脱衣室に遣って、小さな子供たちの脱衣をさせた。8歳くらいの一人の少女は彼女の一歳の弟の服を脱がせた。コマンドの誰かが彼らを脱衣させよと入ってきたとき、少女は叫んだ。「どいて。ユダヤ人殺し！ユダヤ人の血で汚れた手で私の可愛い弟に触れないで。今は私がこの子のお母さん。私の腕で私と一緒に死ぬわ！」。この感動的な場面を記録にとどめたラングフスは、そのすぐ後に、次のような場面も記録している。それによれば、近くにいたおよそ7歳か8歳の男の子が叫んだ。ゾンダーコマンドに対し、「お前はユダヤ人だ！お前は どうしてそんなにかわいい子供たちをガス室に連れて行けるのだ。自分は

生きていながら。殺人者一味のど真ん中で、お前には自分の命がこれほどたくさんの犠牲者の命よりも尊いのか？」と。

1944年夏の終わりにスロヴァキアから一移送列車が到着した。ソ連赤軍に追い立てられ後退したドイツ国防軍がスロヴァキアを占領した結果、44年9月にスロヴァキアからユダヤ人追放が再開されたのだ。

5. 携帯品略奪と身ぐるみ剥奪

1942年夏、経済管理本部は殺害されたユダヤ人の貴重品管理で他の官庁に対する支配権を確立することに努力した。ユダヤ人所有物の利用と引き渡しは「ラインハルト作戦」の枠組みで組織された。この作戦では総督府ユダヤ人の殺害プログラムが問題だった。しかし、略奪指針は総督府以外で殺害されたユダヤ人の「財産価値の取り扱い」にも広げられた。経済管理本部は、大蔵省、経済省、ライヒスバンクの代表者たちとの折衝後、42年9月「ユダヤ人の入植・移住を契機とする所有の活用」の指針をアウシュヴィッツ収容所宛に出した。それは価値あるもの利用できるものの実に詳細なリストを示していた。それは連行ユダヤ人から文字通り完膚なきまでに全財産を奪い取ることを目指し、「隠匿され縫い込められた価値物」をすべて探しだす「最大限の細心の注意」を命じていた (VEJ 16/32)。

アウシュヴィッツに同じころ、30人から40人の一般管理サービス担当親衛隊員が派遣された。彼らはこれ以降、囚人財産管理部で囚人の個人的財産の把握、登録、保管および配分を担当することになった。アウシュヴィッツに着いた囚人は荷下ろし場に彼らの手荷物を置いていかなければならなかった。移住（追放）指針は一人当たり一個のトランクないしリュクサックの手荷物に制限していた。しかし、たくさんの被追放者が——「東方に」移住するといわれ、そこで新しい生活を樹立しなければならないとされたので——衣服や貴重品の他、家財道具、寝具類、あるいは職業上必要になる道具類や工具類を携帯していた (VEJ 16:26-27)。親衛隊は囚人受け入れ

手続き中に彼らが身に着けた衣服や衣服のポケットに隠された貴重品あるいは写真を取り上げた。宝飾品を探しだすため、体の諸開口部が調べ上げられた。囚人が彼らのかげがえのない思い出の品々をしまい込むことに成功するのはまれだった。どんなにひもじい思いをしても手放さなかった妻の思い出のダイヤモンドの指輪さえ見つかり、尋問された（VEJ 16/113）。

ガス室送りと決められた囚人の衣服や手荷物は基幹収容所近くにある倉庫に運ばれた。その倉庫のことを囚人は「カナダ」と称した。彼らにとってカナダという国は計り知れない富の観念と結びついていたからであった。大量移送の結果、そこが満杯になった。収容所司令官ドルフ・ヘスは42年6月、携帯品収納のためさらに四つの馬屋バラックの建設を申請した（VEJ 16/14）。「カナダ」で時には1000人の男女囚人が働き、品物の把握、分類、虱駆除を行い、再利用の準備をした。アウシュヴィッツから逃亡することに成功したヴェッツラー（Alfréd Wetzler）とヴルバ（Rudolf Vrba）は44年4月23日、登録された囚人グループの登録番号ごとに実に詳細な略奪品記録をそれがどこからの移送列車で何人がガス室に送られたかに関連させつつ、32ページもの長大な報告書で詳細に述べている（VEJ 16/108）。43年には携帯品保管場所が再び十分ではなくなった。そこで親衛隊はビルケナウの敷地内に第二保管倉庫、すなわち、「カナダII」を設置した。これは30棟ものバラックから成っていた。それらは44年5月から利用された（VEJ 16:27）。これまた大量のハンガリー・ユダヤ人の連行・殺害と関連していた。

1943年2月、経済管理本部は「ユダヤ人移住からの中古衣料品のこれまでの活用」に関する最初の報告を作成した。それは、ユダヤ人から奪った大量の衣類の統計であった。しかしそれは同時に、民族ドイツ人や空襲被害者などへの配分といった活用先を挙げ、ナチ国家にとって社会政策的な意義があったことを示していた（VEJ 16/53）。

親衛隊は貨幣、外貨、宝飾品および貴金属を箱型容器やトランクに詰めて、四半期ごとにライヒスバンクに送り届けた。現地管理部長・親衛隊上級大佐カール・メッケルの報告によれば、彼が責任者としてベルリンに運

んだものは、1943年4月からの彼の在任期間の総額で500万ライスマルクに達した（VEJ 16:27）。

死亡した収容所囚人の金歯の溶解はすでに1940年から強制収容所の普通のやり方になっていた。しかし、アウシュヴィッツでユダヤ人から奪った金の量がどれほどのものだったかの見積もりは困難であった。なぜなら、登録された死亡囚人から取り出したものだけが記録されたにすぎないからであった（VEJ 16/11）。42年5月中ごろから12月初めまでに得られたデータでは、約200日間に2904人の死体から金および合金製の歯の代用品16325個が摘出された。明らかにもっとたくさんの金歯がガス室で殺害されたものから摘出された。囚人歯科医は死体から信じられないほどのテンポで金歯を摘出しなければならなかった。その金が43年中ごろからはクレマトリウムIIIのそのための特別室で溶解され金の延べ棒にされた。平均して、こうしたやり方で毎月10から12キログラムの金が獲得された。囚人の秘密見積もり（44年6月15日）では、3週間の「ハンガリー作戦」だけで40キロの金を取り出された（VEJ 16/120）。

1942年8月、経済管理本部は、収容所から出る人間の髪も活用されるべしとする命令を出した。女性の髪は大量にクレマトリウムの屋根裏部屋で乾燥され、紙袋に詰められ、さまざまな繊維企業に供給された。これらの企業は髪を工業原料や詰め物材料として活用した。クレマトリウムで焼却された死体の灰と骨は、周辺の農業に分配されるか収容所区域の舗装道路や道路建設に使われた。衣服、特に貴金属や宝石類などの相当部分は、公式的な利用の道には入らなかった。囚人財産管理部で働く人々だけでなく、荷下ろし作業に従事した親衛隊関係者、クレマトリウムの監視人から収容所司令官ルドルフ・ヘス、その妻までが、家政の在庫品を高価な食料品や皮革製品でいっぱいにし、略奪財産で利益を得た。横領はかなりの規模になった。1943年には刑事警察局が腐敗墮落に専門化した親衛隊裁判官コンラート・モルゲン（アウシュヴィッツ裁判で1964年に証言）の特別委員会を収容所に派遣するまでになった（VEJ 16:28）。この委員会は親衛隊員宿泊

所に大量の宝石貴金属類など貴重品を発見した。その捜査結果を踏まえ、カトヴィッツの親衛隊・警察法廷は、親衛隊伍長フランツ・ヴンシュにそうした汚職犯罪で有罪判決を下した（VEJ 16/134）。

荷下ろし場や商品保管庫で仕事をする囚人も何かを盗っておくことが普通であった。民間労働者との交換によって、彼らは食料、嗜好品、薬、道具、さらには抵抗のための武器さえも手に入れた。殺害を予定されたユダヤ人の持ち物を自分の延命のために盗むことについては、囚人のなかに相反する感情があった（VEJ 16:28）。

6. 巨大クレマトリウム運転開始 1943年 3月

総督府領内の絶滅収容所の閉鎖（ベウゼッツ1942年12月、トレ布林カ43年 8月、ソビボル43年10月中旬）の後は、ドイツ併合地域に位置するアウシュヴィッツがユダヤ人殺害の中心施設となった⁵。独ソ戦・世界大戦・総力戦とそれがもたらすヨーロッパ全域の支配統治課題の圧力＝連合諸国の国家・民衆のナチスへの反撃が高まる中で（永岑 [2001]）、1942年 8月以降ビルケナウではクレマトリウムがつぎつぎと建設された。クレマトリウムIIとIVは43年 3月、Vは43年 4月、クレマトリウムIIIは43年 6月、運転を開始した。ヘンリク・タウバーはクレマトリウムIIのゾンダーコマンドのメンバーの一人で、稼働開始からの大量殺害と死体焼却の経過を解放後に証言した（VEJ 16/62）。タウバーは42年11月にクラカウのゲッソーで逮捕され、43年にアウシュヴィッツに連行された。そこでゾンダーコマンドのメンバーにされた。彼は44年10月のゾンダーコマンドの蜂起に加わり、45年 1月逃亡に成功した。戦後はミュンヘンで兄弟と皮革工場を経営し、52年にUSAに移住した（VEJ 16:235）。

⁵ アウシュヴィッツ・ビルケナウとソ連赤軍の位置関係を確認するため、一例として末尾に1943年10月の状態を示す地図を参照されたい。出所：ギルバート、前掲、222。

以下では、この現場体験の詳細で生々しい彼の証言（事情聴取45年5月24日）を抜粋しながら見ることにしよう。その前に一言。ホロコースト否定論者でヒトラー命令否定論者のアーヴィング（イギリス）に対するデボラ・リップシュタット（USA）の痛烈な批判が90年代に刊行された（リップシュタット [1995]）。これが名誉毀損だと、アーヴィングはイギリスの法廷に告訴した。その裁判の中で一つの見せ場は、このタウバーのツィクロンB投下設備に関する証言とそれを裏付けるアメリカ空軍のアウシュヴィッツ・クレマトリウムの空撮写真であった（映画『否定と肯定』2016）。この裁判でアーヴィングは、歴史偽造者として敗訴した。

【「シャワー室」にカムフラージュされたガス室】

1943年3月4日、ゾンダーコマンドは親衛隊員に監視されながら、クレマトリウムIIに連れて行かれた。そこでカポ（強制労働を指揮する囚人）のアウグストがクレマトリウムの構造を説明した。彼はブーヘンヴァルトからやってきた囚人で、そこのクレマトリウムで仕事をしていた人物であった。クレマトリウムIIは地下に脱衣室とブunker、すなわちガス室（通称「死体置き場」の地下室）があった。ガス室はカムフラージュのため「死体置き場」の部屋と書かれていた。脱衣室とガス室の間には通路があった。それは外部からは階段で行けた。階段には滑送路が付けられていた。この滑送路に死体が投げられた。死体はクレマトリウムに運ばれた。

中庭から一つの階段が脱衣室につながっていた。この階段には、鉄製手すりが付けられていた。脱衣室ドアの上には、「入浴と消毒のため」という掲示板。掲示は犠牲者の多言語に対応していくつかの言語で書かれていた。脱衣室の壁に沿って、木製ベンチと番号が振られた衣服掛けがあった。窓のない部屋にはいつもろうそくがともされていた。脱衣室から「入浴のため」という掲示板が付けられたドアを通して、通路にでる。そこに「バニア（蒸し風呂・サウナのロシア語）」という掲示板があった。

ガス室の天井はセメント製の柱で支えられていた。セメント製の柱には

4本の厚い網状針金製パイルが付けられていた。それらは天井へ、そしてそこから室外へ延びていた。このパイルには小さなネット状開口部が設けられていた。そこにガスを蒸発する粉末が入れられる。送電線が部屋の両側のセメント製の柱に支えられた角材に沿って張られていた。囲壁には換気設備が備えられていた。ガス室の換気は脱衣室の換気と結びつけられていた。換気設備は電気モーターで運転された。ガス室内部に水道管はなかった。通路にだけ水道栓があった。ゴム管からの水道水で、ガス室の床が清掃された。1943年末、ガス室は石積みの壁で区切られた。その改造で小さな輸送のガス殺にも利用できるようにした。

最初、脱衣室にベンチも衣服掛け釘もなく、ガス室にシャワーもなかった。両方とも1943年秋にカムフラージュのために取り付けられた。シャワーヘッドは、ガス室のセメントの天井に埋め込まれた木製の台に固定されていた。しかし、水道管との連結がないので、そこから水が流れることは一度もなかった。

通路から死体を上の地上階に運ぶリフトが設置されていた。リフトから焼却室へはドアがあった。焼却室には焼却炉があった。5つの焼却炉が並列に設置されていた。輸送列車で到着した直後にガス室に送り込まれた人々の死体はよく燃えた。そのような死体の焼却ではコークスは最初に火を噴き起こす時だけ必要だった。なぜなら、死体の脂肪がおのずと燃えるからであった。炉の過熱のためにコークスがない場合、藁や材木を使った。しかし、死体の脂肪に火が付くと、炉に入れた死体全部が燃えた。炉内は1000℃から1200℃になった。

【クレマトリウム稼働】

1943年3月4日、タウバーたちゾンダーコマンドは焼却炉加熱のための作業に投入された。早朝から午後4時ごろまで加熱した。この時、政治部の委員会と親衛隊将校がベルリンからクレマトリウムの視察にやってきた。民間人やトプフ社の技術者も視察に参加した。彼らが到着するとゾンダー

コマンドは保管庫から死体を取り出し、炉に入れよと命じられた。保管庫にはおよそ45体の死体があった。それらはすべて栄養状態がよいか太った男性の死体であった。それは森に近いブンカーIIでガス殺された死体であった。視察者たちが、運転を開始したばかりのクレマトリウムIIの処理能力を確かめるために選び出された死体であった。死体を焼却炉に入れ終わると、視察の委員会は時計を取り出し、死体焼却の時間を測った。早朝から加熱していたが、新しい炉で十分に加熱されていなかった。そこで、焼却には約40分かかった。

1943年3月中ごろ、夕方、最初の貨物自動車がやってきた。それにはさまざまな年齢の男女、老人やたくさんのこどもが乗っていた。貨物自動車は約一時間、鉄道駅とクレマトリウムを往復し、たくさんの人間を運んできた。ゾンダーコマンドはクレマトリウム近くの解剖医の自宅で待機させられた。待機中、自動車から降ろされた人々の泣き声や叫び声が聞こえた。約二時間後、ガス室に行くように命じられた。

そこでゾンダーコマンドは積み重なった裸の死体の山を見た。それらは赤い色に、かなりの部分が強い赤色になっていた。ほかの死体は緑色の斑点に覆われていた。口の周りに泡、幾つかの死体からは鼻から出血が見られた。多数は排せつ物にまみれていた。たくさんの死体が目を開けていた。また、たくさんの死体の手足が互いに絡み合っていた。ほとんどがドアのそばにぎっしり積み重なっていた。ガスが出てくる格子状の柱のそばにはわずかしかなかった。人々が格子状の柱から逃げてドアに突進したことが分かった。ガス室は非常に熱く、空気はむっとして息詰まり、我慢できないほどだった。後で分かったことだが、たくさんの人が毒ガスの前にすでに窒息していた。窒息したものが床に倒れ伏し、残りの者がその上に折り重なっていた。ガス室が開かれると、換気装置にスイッチが入れられた。しかし、ゾンダーコマンドは最初の数分間、ガスマスクを着けて作業した。

【死体からの金歯等の摘出処理】

ガス室から出された死体から、理髪師が婦人の髪を切り取った。その後、リフトで焼却室に運び上げられた。死体は保管庫か炉の前の焼却室に置かれた。二人の歯医者が親衛隊員の監視の下で金属の歯と義歯を取り出した。死体からは指輪やイヤリングも取り去られた。歯は箱に投げ込まれた。その箱には「歯医者病棟」のラベルが張られていた。宝石類は別の箱に入れられた。それにはラベルがなく、ナンバーが付けられていただけであった。囚人の中からリクルートされた歯医者は子供を別としてすべての死体の口中を見た。口が開かないと上下の歯列を抜歯に使うペンチでこじ開けた。

監視していた親衛隊員は、折に触れ歯科医がすでに処理した死体の積み込みを中断させ、口中を点検し、しばしば歯科医が忘れた金歯を見つけた。そのような手抜きはサボタージュと判断された。その歯医者は生きのまま焼却炉で焼かれた。証人タウバー自身、一人のフランス人歯医者がこのようにして殺されたことを現場体験した。フランス人歯医者は抵抗し、叫び声をあげた。しかし、親衛隊員は何人もいて、彼を取り押さえ、炉の中に押し込んだ。生きのままの身体が焼かれるのはゾンダーコマンドのメンバーの場合もしばしば罰として課されたことだった。ほかの処罰方法もあった。幾人かはその場で射殺された。ほかの者はプールに投げ込まれ、拷問され、殴られた。裸体で砂利の上を引き回された。

こうした処罰は、ゾンダーコマンドの全員がいるところで、見せしめに行われた。親衛隊にとって冷酷さは秩序維持・順調で効率的な処理の必須要件であった。1944年8月の事件を例にとれば、つぎのようであった。単純労働者の一人で20歳くらいの小さな褐色の髪ユダヤ人（アウシュヴィッツから遠くないヴォルブロム出身）が就業交替の時、一個の金の指輪と時計を隠し持っているのを見つめられた。クレマトリウムで仕事をしているゾンダーコマンドの全員が集められた。みんなが見ている前で、この青年は後ろ手に縛られて鉄棒の一つに吊りさげられた。この状態で一時間ばか

りした後、親衛隊員が手かせ足かせを取り、クレマトリウムの加熱されていた炉に彼を押し込んだ。炉にガソリンを注ぎ込み、火がつけられた。数分後、炉が開かれ、重度の火傷で死ぬ寸前の若者が炉から引き出された。彼はクレマトリウムの敷地を「私が泥棒」と叫ばされながら、走らされた。その後、クレマトリウムの有刺鉄線——昼間は電気が流されていなかった——の垣をよじ登るよう命じられた。彼が上までたどり着くと、クレマトリウム長・親衛隊上級曹長モルが彼を射殺した。瀕死の若者を走らせることが本当にできたのか、別の処罰事例と入り混じているのかと思われるが、見せしめが残酷極まるものであったこと、それをゾンダーコマンド全員に見せる意味は理解できるであろう。

ほかの事例では、親衛隊員がクレマトリウム作業で充分迅速でなかった囚人を「煮え立つ人間脂肪」がたまっている穴に突き落とした。当時は死体がまだ屋外の穴で焼かれていた。たまった脂肪は集められ、焼却プロセス加速のために死体に注がれていた。懲罰で突き落とされた不幸者は、生きたまま穴から脂肪にまみれて引きずり出され、射殺された。

1943年3月中旬、最初の移送列車の死体を焼却するために、タウバーの属するゾンダーコマンドは、絶え間なく48時間働いた。にもかかわらず、すべての死体を除去することはできなかった。その間に、ギリシャからのユダヤ人移送列車——同じくガスされることになっている——が到着したからであった。しかし、ゾンダーコマンドは完全に疲れ果て消耗しきっていたので、ブロックに帰された。交替の別の班が仕事を引き受けた。当時、ブンカーIとブンカーIIに投入されたゾンダーコマンドには、およそ400人の囚人が属していた。タウバー自身は4月半ばごろまでクレマトリウムIIで仕事をした。この時期、ギリシャ、フランス、オランダからの移送列車が到着した。そのほか、収容所内の選別後にガス室に送られた人の死体も焼却した。昼夜二交替で仕事をした。24時間のうちに平均でおよそ2500の死体を焼却した。

【ガス室へのツィクロンBの投下、焼却処理能力】

この頃、タウバーは、犠牲者がどのように脱衣所と脱衣所からガス室に追いやられるかを観察する可能性がなかった。というのは、移送列車が到着すると、コークス室に閉じ込められるからであった。しかしながら、コマンドの二人は発電機の操作のために焼却室に残った。彼も時折その一員だった。その際、彼は焼却室の窓を通してどのように毒ガス粒子ツィクロンBが缶からガス室に「ざっと注がれる」かを見た。すべての移送の後ろに赤十字のしるしをつけた自動車走った。自動車の中には収容所医師メンゲレが作業班長シャイメッツ (Victor Chaimies [VEJ 16:242]) と一緒に乗り、クレマトリウム敷地までやってきた。赤十字のしるしのある自動車からツィクロンの缶が運び出され、ガス室にツィクロン粒子を注ぎ込む小さな煙突のそばに持って行った。シャイメッツは特別の金具とハンマーで煙突の口を開き、ガス室に缶の粒子を注ぎ込み、開口部をセメントのふたでふさいだ。そのような煙突がクレマトリウムIIには4本あった。そのすべてにシャイメッツは小さな缶の中身を降り注いだ。これらの缶には黄色のラベルが張られていた。缶を開ける前に、彼は、全プロセス中携帯していたガスマスクをかぶった。彼の他にも「保健衛生」部のこのための特別の親衛隊員が、この仕事を引き受けた。すべてのガス殺作戦の場に収容所医師が居合わせた。タウバーは頻繁にメンゲレを見かけた。彼のほかに、ケーニヒとティロという収容所医師、それに背が高く瘦せた若い男がガス殺の補助をしていた。メンゲレは作戦中、「早く食わせろ」とシャイメッツに拍車をかけた。ケーニヒはDr. Hans Wilhelm König (1912-1991) という医者であった。1939年ナチ党、43年親衛隊に。43年9月から45年1月までアウシュヴィッツの医師。ユダヤ人を選別し、電気ショック処理をした人物でもあった。45年1月から中部ドイツのミッテルバウとノイエンガンメの収容所勤務。45年以降、ペルツ (Dr. Arved Roderich Peltz) という名前で地下に潜ったという (VEJ 16:242)。

1943年6月、親衛隊は実際の「焼却処理能力」についてベルリンに報告。

焼却炉24時間稼働で、死体「少なくとも4756」を焼却できると。クレマトリウム IIIが6月23日に稼働開始したこと、したがって命じられた全クレマトリウムが完成したことを報告した。基幹収容所の古いクレマトリウム Iが340人、新クレマトリウム IIが1440人、新クレマトリウム IIIが同じく1440人、新クレマトリウム IVが768人、新クレマトリウム Vが同じく768人。合計すると4756人 (VEJ 16/75) となる。史料集の解説では、この数字は設計ミスや事故によるたくさんの運転中断を隠蔽するために意識的に低すぎる数値に設定されたものだという。実際の最大の稼働の場合、一日8000体まで焼却できたという (VEJ 16:29)。

1943年春、帝国保安本部^{ライヒ}によって組織された西ヨーロッパからのユダヤ人移送列車の数は減少した。また、ドイツ本国からも、43年2月と3月にまだ残っていたユダヤ人の強制移送のための最後の大摘発、いわゆる工場作戦が終わった後は、ほぼすべてのユダヤ人が移送されてしまっていた。43年3月、ギリシャ・ユダヤ人の移送が始まった。43年8月までに48500人がアウシュヴィッツに到着した。そのほとんどがテッサロニキ出身であった。その4分の3以上が到着直後に殺害された。親衛隊はさらに8000人——アテネと以前にイタリアが占領していたギリシャ諸市町村から——を、44年3月から8月の間にアウシュヴィッツに連行した。43年5月にはオーバーシュレーゲン地域に残っていたゲッターからの移送も始まった。この地域のゲッターは8月に閉鎖された。アウシュヴィッツに近い町ベンジン、ソスノヴィエツ、ザヴィエルチエから35000人のユダヤ人がこの時期、アウシュヴィッツに連行された。そのうち27600人は直ちにガス室で殺された (VEJ 16:29)。

1943年9月と12月に、42年夏以来通例となっていた処理方法に反して、選別が行われないはじめてのユダヤ人移送がアウシュヴィッツに到着した。テレーゲンシュタット収容所からの移送であった。ビルケナウに移送された男女子供はBIIB棟に収容された。それで囚人たちはすぐにこの棟を「テレーゲンシュタット家族収容所」と称した。ほかのすべての囚人と同様、

彼らも強制労働を行った。また、貧弱な食料の諸結果と闘わなければならなかった。にもかかわらず、家族収容所の囚人はさしあたりガス室での死から免れた。44年2月初めに収容所から密かに持ち出されたハインツ・ヘルマンの叔父への手紙がその事実を知らせている（VEJ 16/95）。しかし、彼らのほとんどはその約一か月後、3月8日と9日に殺害作戦の犠牲となった（VEJ 16:323）。ただし、その数日前の3月6日に、3月23日と25日付で知人と親類にはがきを書かされた。それは彼らが生きている証拠品とされた。3月8日に、9月の移送者のうち3792人が殺された。約70人だけが生き残った。14歳の双子シュタイナー（プラハ出身）がその中に含まれていた。双子は3月7日にテレージエンシュタット家族収容所から抜き出され、メンゲレのもとで医学実験に使われることになった（VEJ 16/99）。

親衛隊は赤十字国際委員会のテレージエンシュタット視察団訪問を控えて、この収容所の人数を減らすことを決めた。1944年5月、過剰とされたテレージエンシュタットから新たに7500人の囚人を乗せた移送列車が到着した。44年7月初め、親衛隊は家族収容所BIIbの何百人かの男女を労働配置に就けた。その後、7月11日と12日にこの家族収容所にまだ残っていた2500人の男性と青年、4300人の女性と少女を殺害した。テレージエンシュタット家族収容所の総数17517人の囚人のうち、生き残ったのは3500人だけであった。しかしこのうち、半分以上はこの後の収容所生活とその後の「死の行進」（後述）で死んだ。親衛隊がビルケナウに家族収容所を設置した動機が解明されているわけではない。しかし、強制された手紙・はがき発信作戦からして、「東方」へ移送されるユダヤ人が殺害されたのではなく、家族と労働収容所で生存しているというフィクションを親衛隊が維持したいという理由があったと推測されている。ヒムラーがテレージエンシュタット家族収容所によって外国からの視察団に「ユダヤ人労働収容所」を呈示する計画を持っていたことも関係していたであろう（VEJ 16:30）。

7. 労働力の絶対的不足と囚人の労働配置 1942/43

囚人は最初、特に収容所建設、管理諸活動、農業および地域の開墾に投入された。その後すぐに収容所近隣での親衛隊独自の企業設立に利用され始めた。アウシュヴィッツの最も重要な親衛隊経営に属するのは、1941年半ばに操業開始したドイツ軍需工場であった。ここでは多い時で5000人の囚人が窓、ドア、家具などの製造に携わった。軍隊のための弾薬箱やスキー板を製造し、43年1月以降は自動車修理、後には航空機分解に従事した(VEJ 16/108)。

ドイツの民間軍需企業による囚人労働力の搾取は、アウシュヴィッツではすでにユダヤ人大量移送開始前に一つの役割を演じていた。1941年4月以降、イ・ゲ・ファルベン社は親衛隊と労働者貸借契約を結び、囚人をモノヴィッツの工場建設場所に投入した。未熟練労働者と熟練労働者を一日当たり3から4ライヒスマルクの使用料で労働力として利用した。そのほか、イ・ゲ・ファルベン社は収容所建設を支援した。親衛隊に建築資材や材料割り当てを譲り、親衛隊のドイツ軍需工場に発注も行った(VEJ 16:31)。

囚人の労働配置は、1942年春から親衛隊が強制収容所囚人を進んで軍需工場に用立てする姿勢がはっきりし、アウシュヴィッツへの大量移送を開始すると、新しい次元になった。「労働能力あるもの」と「労働不能者」との間の体系的な差別が始まった。その際、親衛隊は強制収容所囚人を民間企業の敷地で宿泊させるのを回避しようと尽力した。親衛隊は、企業が収容所敷地内に製造の一部を移すことを好んだ。しかし、イ・ゲ・ファルベン社の建築現場の場合、囚人は最初毎日収容所から7キロ離れたモノヴィッツの建築現場まで列をなして連行した。これでは作業効率が悪かった。そこで収容所司令官ヘスも42年6月、外部収容所設置に同意した。しかしそれは42年夏の発疹チフス伝染病の流行で延期となった。42年10月になって初めてさしあたり囚人2100人が外部収容所に引っ越した。その数は44年8月までに11500人に増えた。42年春以降、ユダヤ人囚人のモノヴィッ

ツへの投入も計画された。44年には囚人労働者に占めるその割合が90%にもなっていた（VEJ 16:31）。

親衛隊は、自分の諸企業のためにはすでに1942年夏、ユダヤ人囚人を仕事場に固定した外部宿泊所に出していた。60キロ離れたゴレシャウの親衛隊建築資材工場「ゴレシャウ・セメント株式会社」に42年7月最初の外部収容所を設立し、そこに投入した。採石場とセメント製造における健康に害を与える重労働が、たくさんの囚人を死亡させた。また、国家コンツェルンであるライヒスヴェルケ・ヘルマン・ゲーリングが手に入れた炭坑ブジェシュチェ・ヤヴィシヨヴィツェでも、42年8月、まず150人のユダヤ人囚人労働の投入が始まった。すでに42年9月には経営指導者オットー・ハイネがユダヤ人囚人の高い疾病率について苦情を言い、病人の移送を求めている。そこでも伝染病発疹チフスへの感染者が特記されていた（VEJ 16/29）。病人はビルケナウの疾病地区に運ばれた。その多くが食料、衛生、医療の不足で、あるいは選別の後で死んだ（VEJ 16:32）。

1942年9月以降、親衛隊は既述のようにシュペーアの軍需省との合意に基づき、アウシュヴィッツに移送されたユダヤ人を以前より目的意識的にドイツ軍需工業への労働配置に振り向けることを計画した。しかし、労働力不足に悩む別の機関も、移送ユダヤ人を手に入れようとした。アウシュヴィッツ収容所司令官ヘスとの間で取り合い問題が発生した。42年夏にヒムラーがオランダ、フランス、ベルギーからの移送列車を途中のオーバーシュレージエンの都市コーゼルで停車させ、男子労働力を軍需工業のために引き抜くことを許可した。ヘスは42年12月、オランダからのユダヤ人移送列車を直接収容所に運ぶことを命じ、途中停車をやめさせることに成功した（VEJ 16/35）。

軍需工業は時とともに諸企業への労働力供給で影響力を高めること、そして特に重要な軍需部門への強制収容所囚人の割り当てを中央で操作することに成功した。最初はおっぱら経済管理本部が囚人労働の要求と許可に権限を持っていた。しかし、1943年には地方の軍需当局もアウシュヴィッ

ツからの強制収容所囚人の軍需生産への配置を組織し始めた。例えば、カトヴィッツの軍需査閲官は43年11月末、軍需大臣にアウシュヴィッツから提供される男性10000人と女性20000人の囚人の配置の査閲のための監視員についてヒムラーと交渉するように求めた。経済管理本部は、軍需諸企業とすべての問題を検討した後、囚人の労働配置を許可するだけの役に甘んじることになった。経済管理本部はこの分野では事実上無力化した（VEJ 16:32）。

【ドイツ国内へのユダヤ人囚人の労働配置問題】

1943年夏まで、親衛隊はユダヤ人囚人を労働力としてドイツ本国に引き渡すことを拒否した。42年から43年まで、親衛隊は特にポーランド人のアウシュヴィッツ囚人をドイツ本国の軍需経営に仲介した。彼らポーランド人は地域住民と密接なコンタクトがあり、親衛隊は彼らを治安上潜在的な危険分子とみなしていた。彼らを地域から切り離すことに意味があったからである。しかし、ユダヤ人囚人は、これまでと同様、主として収容所の経営のたくさんの建築プロジェクトで、そして農業経営で労働させた。さらに、新設の外部収容所（ゴレシャウ、ヤヴィショヴィッツおよびモノヴィッツ）に投入した。これと並行して、親衛隊は43年春、収容所敷地内で新しい大プロジェクトを企てた。エッセンへの空襲の後、クルップ社が43年3月に信管製造をアウシュヴィッツに移転することを計画したのである。3月16日付経済管理本部とクルップ社との会談記録（クルップ社文書）によれば、防衛経済指導部と会社との間で、ベルリンの二つの会社で就業中の500人のユダヤ人労働力をアウシュヴィッツに信管製造のために移すこととなった。会談で親衛隊代表は、アウシュヴィッツでの信管製造の場合には親衛隊の完全な支援を期待できると請け合った（VEJ 16/63）。

しかし、実際には1943年8月、クルップ社代表と親衛隊の間で見解の相違がはっきりしてきた。特に弾薬製造特別委員会の防衛経済指導者からは、「訓練を受けた囚人熟練労働者、あるいは囚人そのものの引き抜きが政治

的警察的必要性によって発生すること、それによる労働過程の遅延を計算に入れなければならないこと」など、懸念が表明された。この不一致は解消されなかった。クルップ社はこのプロジェクトから撤退した。クルップ社は、計画された信管製造をニーダーシュレージエンの操業停止中のある繊維工場に移転することにした。ここには、44年夏以降、アウシュヴィッツから引き渡された女性ユダヤ人が労働力として投入された。43年9月、陸軍最高司令部は赤軍接近を逃れてウクライナから疎開したヴァイクセル・ウニオン工場を収容所近隣に完成した工場に移すことを決めた。43年10月、そこで信管製造が始まった。

43年夏、幾つかの大きな国家的半国家的企業がアウシュヴィッツの外部収容所地域に設立された。これらには、主としてユダヤ人囚人が投入された。オーバーシュレージエン機械貨車工場株式会社、オーバーシュレージエン・エネルギー供給株式会社など。外部収容所地域モノヴィッツにはイ・ゲ・ファルベン社ブナ（合成ゴム）工場建設ゲレンデがあった（VEJ 16/69）。43年9月からイ・ゲ・ファルベン子会社フルステングラーベはユダヤ人のアウシュヴィッツ囚人をイ・ゲ・ファルベン・モノヴィッツ工場の石炭供給のための二つの石炭鉱山、フルステングラーベとヤニナグラーベに、44年2月からはギュンターグラーベにも、投入した。44年までに工業と農業で外部収容所数が40以上に達した（VEJ 16:33）。

前線への兵士動員、軍需工業への労働力配置によりドイツ本国における労働力不足が先鋭化したので、43年夏、経済管理本部は、遂に一人のユダヤ人囚人も本国の収容所に引き渡さないという原則からさえも逸脱せざるを得なくなった。そこで、8月25日、オラーニエンブルク（ベルリン近郊）の経済管理本部からアウシュヴィッツ収容所司令長官ヘスに対して、調達可能人数を問い合わせた。目下、アウシュヴィッツ収容所にいる25000人のユダヤ人囚人のうち、本国の軍需品製造業に配置するため、「完全に労働・投入可能なユダヤ人の数を知りたい」と。回答がないので、8月26日、経済管理本部担当官はもう一度、電報で問い合わせた。8月29日の回答は、

服役している25000人のユダヤ人のうち、「労働可能なものは3581人しかない」と。しかも、これらは余すところなく軍需計画に投入されており、「引き渡すことはできない」と。ベルリンの担当官さえも、この事実に驚き、「残り21500人のユダヤ人は何をしているのだ？ なにかおかしい。改めて経過を知らせるように」と求めた(VEJ 16/87)。その結果、9月28日、アウシュヴィッツからマウトハウゼン収容所にはじめて600人のユダヤ人が移された。10月1日にはさらにアウシュヴィッツ囚人から600人のユダヤ人が新設のグロースローゼン外部収容所フュンフタイヒェンのクルップ社ベルタ工場に移された。だが、44年春までドイツ本国の収容所に引き渡されたのは比較的少数のユダヤ人であった。なぜなら、親衛隊は壊滅的な食糧事情により、あまりにも少数の労働能力あるユダヤ人しか提供できなかったからであった。他方ではこれまで同様、ドイツ本国へは非ユダヤのポーランド人を送るのを優先したからである。44年春になって初めて、アウシュヴィッツがユダヤ人労働力のドイツ本国への最重要積み替え地になった(VEJ 16/34)。

8. 収容所構造の再編 1943秋

1943年のうちにアウシュヴィッツの囚人数は3倍化した。つぎつぎと外部収容所が設立されたため、管理費は膨大に膨れ上がった。その結果、43年秋、収容所構造が全体的に再編され、新秩序が樹立された。収容所複合体は三分割され、それぞれに司令部と予防拘禁収容所が置かれた。すなわち、アウシュヴィッツ第I(基幹収容所)、アウシュヴィッツ第II(ビルケナウ)、そしてアウシュヴィッツ第III(モノヴィッツ)。農業外部収容所は、第IIの管理下に、工業経営の外部収容所はアウシュヴィッツ第IIIの管理下に置かれた。しかし、ユダヤ人殺戮、並びに選別と略奪財産活用に関連する中心的機能は、統一的に組織された。

この構造再編は収容所の歴史のなかでは最も包括的な人事異動と結びついていた。これまでの司令官ドルフ・ヘスは、オラーニエンブルクの経

済管理本部のDI部に配置転換となった。彼の後任アルトゥール・リーベ
ヘンシェルがアウシュヴィッツ第I司令官になった。アウシュヴィッツ第
IIの司令官としフリードリッヒ・ハルチェンシュタイン、アウシュヴィツ
ツ第III司令官としてハインリヒ・シュヴァルツが任命された (VEJ 16:37)。

政治部長マキシミアン・グラープナーは、コンラート・モルゲンの調
査に基づき、拘留された。彼に対しては、44年10月、不許可の射殺の咎で
裁判が開かれた。しかし、結審することはなかった。すでに同月の抵抗運
動秘密通信は、この裁判が茶番劇だと批判していた。それによれば、グラ
ープナーはワイマール郊外の収容所ブーヘンヴァルトの親衛隊法廷で死刑判
決を受けた人物であった。彼の罪は、約40の案件における権限逸脱と恣意
的射殺の廉であった。しかし、「恩赦で」12年間の拘留刑に減刑されていた。
だが、抵抗運動秘密通信によれば、グラープナーは何千件もこのような逸
脱と恣意的射殺を犯していた。しかも彼は、「登録された10万人以上の殺
害を司令官ヘスと政治部長の彼の指導下で遂行」していた。その意味では
彼の逸脱行為は巨大な犯罪の一部をなすものであった。グラープナーは親
衛隊法廷における証言で「司令官ヘスやほかの共犯者にこそ重大な責任が
ある」と弁明した (VEJ 16/146)。

これまで1943年秋の人事異動が、モルゲン委員会調査とアウシュヴィツ
ツに関するBBCの大量死スクープ報道と関連しているのではないかとの
推測もなされてきた。しかし、定期的な人事異動と状況適応は、親衛隊支
配システムの確固とした構成部分であった (VEJ 16:38)。43年11月の大きな
人事異動は、むしろ収容所の大きな機能転換、総督府におけるラインハル
ト作戦終了 (11月)、さらに大きくは2月スターリングラード敗退につづ
く夏のクルスクにおける史上最大の戦車戦での敗退、それらの帰結として
の占領支配地域の大幅な縮小といったことと関連しているとみるべきだろう。

その後も以前と同様ユダヤ人移送列車が定期的に到着するとしても、西
ヨーロッパとドイツ併合東部地域からのユダヤ人追放とその移送は、大幅
に減少した。ドイツ支配下にあるユダヤ人の大多数はすでに殺害されてし

まっていたからである。43年末の時点で何十万かのユダヤ人が生存していたのはハンガリーだけであった。同盟国ハンガリーのユダヤ人には、このときまで「まったく手が付けられていなかった」(VEJ 16:38)。

他方で、アウシュヴィッツ-ビルケナウは、今や労働力不足で追い詰められた軍需工業に対して労働可能囚人を供給することに神経を集中すべき情勢となった。そのため収容所新司令官リーベヘンシュルは、基幹収容所領域のテロ体制を緩和せざるを得なかった。その結果、射殺数が減った。それに対して、ビルケナウとモノヴィッツのユダヤ人囚人の状況——特に壊滅的な食料宿泊事情のもとで、収容所体制に組み込まれた機能囚人の暴力と殺人的労働投入に苦しんでいたが——については、人事異動はほとんどとるに取りない影響しかもたらさなかった (VEJ 16:38)。

9. 「ハンガリー作戦」と囚人労働力積み替え地への機能転換

1944年はじめ、ドイツ軍需工業の労働力不足がさらに劇的に先鋭化した。民間強制労働力と戦時捕虜の補給は枯渇した。ドイツ国防軍が全戦線で撤退に追い込まれていたからである。東部戦線でソ連大軍に撃破され、撤退に次ぐ撤退でドイツ国防軍がハンガリーに進駐したのは44年3月であった。しかし同時に、これにより何十万かのハンガリー・ユダヤ人が、親衛隊執行権力の掌中に入った。約2か月の準備期間の後、ハンガリーからの最初のユダヤ人移送列車がアウシュヴィッツに到着したのは44年5月初めであった。44年5月中旬からはほぼ毎日、何列車か、多いときは4列車が到着した。44年7月初め、ハンガリーの摂政(国王不在の元首の地位)ミクローシュ・ホルティがドイツ敗戦を見越して、最終的にユダヤ人追放の停止を命じるまでに、約438000人のユダヤ人がアウシュヴィッツに連行された (VEJ 16:38)。

この「ハンガリー作戦」、アウシュヴィッツの歴史で最大の大量殺戮作戦の準備のために、経験を積んだ実力実証済みの殺戮エキスパートが呼び

戻された。その中には、43年11月にベルリン郊外オラーニエンブルク収容所に栄転していた元収容所司令官ルドルフ・ヘストとオットー・モルがいた。モルは、アウシュヴィッツ諸クレマトリウムの元責任者であり、44年3月から外部収容所グライヴィッツIの長として活動していた人物である。さらに、オスヴァルト・ポールの個人助手リヒャルト・ベアがアウシュヴィッツ第Iの司令官に、ヨーゼフ・クラマーが、これまでのナッツヴァイラー司令官からアウシュヴィッツ第II（ビルケナウ）の司令官に着任した（VEJ 16:38）。

1944年5月から6月ほどにたくさんの犠牲者が収容所にやってきたことは、いまだかつてなかった。5月に23万人、6月に17万人。44年初夏、アウシュヴィッツはなんといってもハンガリー・ユダヤ人の殺戮が中心であった。しかし、この時期、ユダヤ人囚人の他のグループもアウシュヴィッツに連行され、そこで殺されるか、さらに別の場所に移送された。総督府では、まだ残っていた最後のユダヤ人強制労働収容所が片付けられた。同様に、マイダネクのいくつかまだ残っていた外部収容所とクラカウ郊外プワシュフ収容所が撤去された。44年8月、リッツマンシュタット・ゲッターの最終的解体の過程で67000人の男女ユダヤ人（軍需工業への動員で生きながらえていた）がアウシュヴィッツに送られた。彼らはそこから外部収容所に移されるか、直ちに殺害された。トリエステとカルピのフォッソーリ村からはイタリアのユダヤ人が送り込まれた。同じように、スロヴァキア、フランス、オランダ、ベルギーからも散発的に移送列車がやってきた。44年5月に約7500人、9月と10月に18400人のユダヤ人がテレージエンシュタットからアウシュヴィッツに連行された（VEJ 16:39）。

昼と夜を問わず、つぎつぎと入ってくる輸送列車は収容所の処理能力をいろいろの点で凌駕した。親衛隊にとっては、到着する輸送列車の選別、大量に発生する手荷物の分類整理、労働投入選別者の登録と宿泊手配、その個々の輸送列車への割り当て、そのために必要な衣類の装備といった大量の作業が、かつてないような物流的コストと人的消耗を意味した。44年

8月、手元にある囚人衣服では、労働投入予定の全囚人に与えるには不十分だった。ユダヤ人労働投入を有効に行う立場からは、衣服が足りないし汚いと衣料等調達担当の親衛隊員に対する批判が噴出する始末だった。担当者からすれば、移送者数が多すぎて洗濯物を「前もって洗うなど不可能」であった。殺害されたユダヤ人から取り上げた衣服は無差別に囚人に配分された。たとえば、大人の女性が12歳の少女のマントを投げ与えられるなど（VEJ 16/133）。

労働投入に選ばれた人々は選別の後、登録なしのいわゆる通過ユダヤ人として「ジプシー収容所」とか「メキシコ」と称されたところに宿泊させられた。前者には23000人以上のユダヤ人——その中にはたくさんの家族がいた——が送り込まれた。しかし、その80%が伝染病と病人殺害で死去した。この収容所を片付けようという親衛隊の最初の試みは、1944年5月、囚人の抵抗で挫折した。44年8月2日から3日にかけての夜、まだ約4300人残っていたこの収容所は解体された。親衛隊は918人の労働可能ユダヤ人をブーヘンヴァルトに引き渡した。労働不能と宣告された男女子供約3000人はガス室で殺害された。建築途中の「メキシコ」バラックに配置されたユダヤ人は、自分の運命が決められるまで、直に地上で寝て、何日、何週間、場合によっては何か月も、待機しなければならなかった（VEJ 16:39-40）。

ドイツ軍需工業は特にハンガリー・ユダヤ人移送によって計画中の巨大プロジェクトの新しい労働力が得られるものと期待した。1944年3月1日、航空省・軍需省によって戦闘機の集中的増産のための参謀部が設立され、戦闘機生産をしゃにむに推進しようとした。しかし、すぐに空軍軍備全体の生産の推進が強行されることになり、その地下への移転を進めることになった。こうした窮境において、44年4月、ヒトラーは10万人のハンガリー・ユダヤ人を地下航空機製造工場のために投入することを許可した。しかし、その前に克服すべき難問があった。

軍需省次官・戦闘機参謀部長カール-オットー・ザウアーはドイツ軍需

工業の諸企業で目的意識的に収容所囚人投入を行わせようとしていた。しかし、彼は44年6月、「まだ2万人の収容所囚人が完全には利用されていない」状態に追い込まれていた。軍需諸経営が収容所囚人の使用申請を躊躇していたのだ。その理由として特に監視隊編成の困難性があった。また、バラック建設用の資材割り当て制限があった。親衛隊は収容所囚人をまず1000人（後500人）の大きなグループで引き渡すことにした。しかし、多くの企業がそのような集団での投入可能性を持っていなかった。それでも44年夏から晩秋まで、囚人10万がアウシュヴィッツから本国方面の労働配置に向かった。「引き渡し部署」としてのアウシュヴィッツは、労働不能になった男女軍需労働者の引き取りについても責任を負った。そこでほかの収容所（シュツットホーフ、マウトハウゼン、ブーヘンヴァルト、ザクセンハウゼン）からアウシュヴィッツへの病人移送が増えていった（VEJ 16:40）。

10. 最末期収容所体制と全面的敗退による「死の行進」

1944年のうちにナチス支配下の収容所体制は非常に膨張した。その拡張は、西から東へ、また、北から南へ、それぞれ約2000キロ。イギリス海峡のチャンネル諸島のオルダニー島からルブリンまで、エストニアの収容所からオーストリアとスロヴェニア国境のローイブルパスまで達していた。まだ残っていた17の主要収容所の他に、労働力需要のため戦争最後の年にさらに400以上の外部収容所が設置された。立地は既存あるいは計画中の軍需企業所在地であり、あるいは防衛施設建築のためであった。労働能力ある囚人の大部分は、軍需工業の地下移転のための巨大で「無意味な」プロジェクトに投入された。占領東部地域の最後の諸ゲッターや強制労働収容所の解体後、また、ワルシャワ蜂起後のポーランド人民間人の大量逮捕の後、44年初めには囚人数が300000人を少し超えるばかりになっていた。しかし、44年8月には524000人に、45年1月までに714000人に増えていた。

そのうち、約三分の一がユダヤ人であった (VEJ 16:57)。

1944年、前線が東西両側からドイツ支配地域に迫ってきたとき、親衛隊は収容所囚人をどう処理するべきか決定しなければならなかった。しかるべき構想があるわけではなかった。ナチス指導部は最後まで、あたかも一定領域のみを中期的に放棄しなければならないのであって、それ以上の連合国の進撃は阻止できるものとして行動した。諸収容所はいつも敵の軍隊が入ってくるわずか数日前に慌てて撤去された。こうした撤去を親衛隊は「疎開」と称した。親衛隊の最優先目標は、放棄する領域から人間と生産手段を取り去ることであり、すべての動産は撤去のとき持ち去られた。親衛隊は装備品家具調度類の他、囚人も撤去対象とした。それらを敵の駒にしてはならなかった。収容所囚人を連合国の手に渡してはならないだけではなかった。彼らをナチス支配に反対する勢力の労働力や支援者にしてはならなかった (VEJ 16:57)。ゴールドハーゲンのような解釈、「死の行進」を異常な反ユダヤ主義による殺害を目的とするものなどというイデオロギイ的解釈は、事実関係の表面的短絡的な見方であった。殺害自体を議論することはあっても、それはいつも放棄された (VEJ 16/138, 163)。

「死の行進」とは、戦争最末期のたくさんのナチス強制収容所の撤退輸送を包括する概念である。それは、ソ連軍の接近から逃れるためドイツ人自身が大量に東部ドイツから「疎開」し、逃亡し、難民化し始めるなかで起きた (永岑 [2001] 第7章)。

「死の行進」において、囚人の大量死は親衛隊の主たる目的ではなかった。ただ、それをそれ以前の諸条件の圧倒的劣悪化に加えての、行進過程で起きる必然的随伴現象と見なして容認し、あらかじめ計算に入れていた。労働能力ある囚人の殺害は意図せざることであった。しかし、収容所幹部は、囚人の健康状態を維持するためには何もしなかった。囚人を仮借なく非人間的生存諸条件に置いた。病気囚人の殺害はすでに何年にもわたって収容所の日常となっていた。それが44年夏以降、非常に強化された。45年春まで、全収容所システムで病気囚人殺害作戦が収容所の内的安定化に資する

ものとして強化された。その目的のため、アウシュヴィッツの大量殺害で得た経験を活かす殺害スペシャリストが、各収容所を回った。病气囚人の殺害施設が、戦争最後の年にドイツ国内の収容所（シュツットホーフ、マウトハウゼン、ブーヘンヴァルト、ラーフェンスブリュック、ザクセンハウゼン）でたくさん増設された（VEJ 16:58）。

降伏の年、親衛隊は最高度に殺人的な活動を展開した。「死の行進」は、徒歩あるいは鉄道輸送で、貨物自動車、荷車、はしけや船での場合もあった。それはこの時点で収容所に生き残っていた囚人の三分の一以上の死をもたらした。彼らは消耗する行進で力尽きて倒れ、餓死し、凍死した。また「死の行進」中、連行する警備隊によって、仮に逃亡できても敗走する国防軍部隊や地方警察官、あるいは民族突撃隊のメンバーによって、しばしば射殺された。過密貨物車で窒息死したり、のどが渴いて死んだり、過密受け入れ収容所で栄養不足や食糧不足、さらには伝染病で死んだ。「死の行進」で死去した囚人の総数は、資料欠如で正確には計算できない。しかし、約25万人と見積もられている。そのうち、少なくとも10万人がユダヤ人囚人であったと推測されている（VEJ 16:55）。

「死の行進」の時期は、第三帝国断末魔のカオス、秩序壊滅によって特徴づけられる。その渦中でナチ体制の罪の痕跡除去も広く見られ、混乱を助長した。しかし他方で、犯罪者サイドが残した証拠類、責任ある諸部署相互間での口頭や電話でのやり取り・議論、多数の文書、命令や指示などから、末期状態の多様なあり方を追体験し、概観することもできる。ドイツの市町村を通り過ぎる何十万もの衰弱した人々の輸送のありさまや結果は、民間人や地域の当局の記録にもとどめられている。各地の地元警察、市町村長や郡長、それに聖職者が例外状況でどのように行動すべきか、上に問い合わせた文書が残っている。それらのドキュメントのなかでも特に多いのは、多くの場所に残された死者をどう扱うべきかに関するものだった。囚人自身も、疲労困憊する移送過程で、ごく最低限の物しか携帯しなかったにもかかわらず、メモなどを残していた（VEJ 16/172, 173, 258, 264,

271)。

おわりに——アウシュヴィッツ収容所複合体の撤去

ナチス強制収容所システムの撤去はソ連軍の進撃の直接的結果であった。それは1944年2月と3月にバルト諸国で始まった。次いで、赤軍が44年3月にルブリンから150キロにまで進撃してきたとき、経済管理本部長オスヴァルト・ポールが総督府領内ルブリン-マイダネク収容所の撤去を命じた。同年3月末から7月の間に親衛隊は9千人の囚人をアウシュヴィッツと収容所複合体ナッツヴァイラー・グロース-ローゼン、プラショフ（クラカウ近郊）とラーフェンスブリュックへ移した。7月23日、マイダネクは赤軍第一白ロシア・フロントとポーランド国内軍のコントロール下に置かれた（VEJ 16:72-73）。

西部の収容所の撤去も、米英軍のドイツ国境への接近とともに始まった。最初は、1944年9月、オランダのヘルツォーゲンブッシュ（ブフト）とフランス・アルザス地域のナッツヴァイラーの収容所複合体の部分撤去であった。前者は43年1月以降、ユダヤ人移送の中継収容所として機能していた。しかし、総督府のソビボルとアウシュヴィッツへの囚人連行の後、44年6月以降はユダヤ人囚人が一人もいなかった。後者の場合も同様であった（VEJ 16:74）。

アウシュヴィッツの場合、その収容所複合体撤去の直接の契機は、1945年1月の赤軍のヴァイクセル-オーデル攻撃であった。この収容所複合体の囚人数は、44年8月、約140000人であった。44年夏以降かなり多数の囚人グループがドイツ本国の労働配置に引き渡されたため、ほぼ半減していた。撤去直前、アウシュヴィッツには約67000人の囚人がいた。そのうち約31000人がアウシュヴィッツIとアウシュヴィッツII（ビルケナウ）にいた。残りの36000人は30ほどの外部収容所にいた（VEJ 16:75）。

アウシュヴィッツにおける体系的ユダヤ人殺戮は1944年11月に停止された。ついで親衛隊は殺害施設の解体も開始した。ゾンダーコマンドの囚人

の記録から推測されるところでは、かなり前からクレマトリウムⅡとⅢの技術的設備をマウトハウゼン収容所から遠くないところに再建する計画が練られていた。この目的のため、45年1月と2月に殺害施設専門家とゾンダーコマンドの囚人がマウトハウゼンに引き渡された。火葬設備製造のトプフ社がマウトハウゼン近くにビルケナウの一つを移転して新しく建設する草案が残されている（VEJ 16/207）。この殺害施設は、マウトハウゼンだけでなく、ダッハウ、フロッセンビュルク、ブーヘンヴァルトの病気や労働不能の囚人の殺害にも使うことが予定されていた。しかし、実際には赤軍進駐により、そうはならなかった（VEJ 16/157）。

1944年12月、オーバーシュレージエン大管区指導者フリッツ・ブラッハトはオーバーシュレージエン全住民の疎開計画を作成していた。ドイツ民間人が道路で優先された。しかし、ブラッハトは治安上の理由でアウシュヴィッツからの囚人隊列にも主要な難民道路の利用を許可した。それは20キロにわたってほかのすべての避難民に対しては閉鎖された（VEJ 16/170）。しかし、急速な前線の展開がブラッハトの計画を時機を失したものとした。本国への移動・退却の状況はカオスそのものとなった（VEJ 16/201）。

1945年1月17日から21日の間に約56000人の囚人がアウシュヴィッツ全収容所複合体から厳寒のなかを徒歩で西に向かって連行された。行進不可能なおおよそ9000人の囚人は残された。隊列は、二つの主要ルートで行進した。一つは北西方向に55キロ離れたグライヴィッツに、第二のそれより小さな隊列は南西に63キロ離れたロスラウに。これらの二つの場所で囚人は無蓋の貨物列車に乗せられた。ブーヘンヴァルト（男性14000人）、マウトハウゼン（男子9000人）、ラーフェンスブリュック（女性7000人）、ベルゲン-ベルゼン（女性4000人）、そしてミッテルbau-ドーラ（男性4000人）に、そしてもっと小さなグループがフロッセンビュルク、ダッハウ、ノイエングアンメに連行された。15000人の囚人はグライヴィッツからおおよそ250キロ離れたグロス・ローゼンに行進させられた（VEJ 16/76）。

アウシュヴィッツからの列車移送の多くが1945年1月後半、プロテクトラート・ベーメン・メーレン地域を通過した。鉄道員や地方警察は1月末、かなりの死体が線路沿いに発見されたことを伝えている。絶望した囚人が列車から転落した。死者は貨車から投げ棄てられた。逃亡者は地方警察に射殺された。プロテクトラート地域での囚人の状態と約500人の死亡は、住民を驚愕させた。しかし、それはチェコ人の抵抗を活性化させた。こうした経験から、プロテクトラート・ベーメン・メーレンの国务大臣カール・ヘルマン・フランクは後続のグロース・ローゼンからの移送についてプロテクトラート通過禁止を命じた（VEJ 16/195, 210）。

1944年夏以降、バルト地域収容所からの撤退移送の受け入れ収容所となったのが、シュトゥットホーフであった。今やここは政治犯集中収容所からユダヤ人囚人収容所に転換された。44年後半、約25000人の囚人がリトアニアのカウナスとラトヴィアのリガから、ここに連行された。さらに、23600人がアウシュヴィッツから、シュトゥットホーフ外部収容所の労働配置に割り当てるものとして送り込まれた。労働能力ある新参者は外部収容所に引き渡された。元の収容所は今や死亡収容所というべきものになった。44年7月から45年1月の間に9400人のユダヤ人囚人が飢餓や病気、意図的殺害で生命を失った（VEJ 16:76-77）。

グロース・ローゼン収容所複合体の最初の撤退措置も、ソ連軍の進撃を受けて始められた。それは、1945年1月19日、赤軍の第一ウクライナ・フロントがブレスラウ東方の元のドイツ国国境——ヴァルテラント大管区とニーダーシュレージエン州の間の国境——を突破したことによる。高級親衛隊・警察指導者ハインリヒ・シュマウザーがオーデル川東部のすべての外部収容所の撤退とこの地域の基幹収容所への移動を命じた（VEJ 16:78）。

アウシュヴィッツ、シュトゥットホーフ、グロース・ローゼンの収容所複合体からの撤退で、ドイツ本国内の収容所に100000人以上の囚人が連行された。受け入れ収容所に到着したときの状態は、当地の囚人たちを震え上がらせた（VEJ 16:80）。

強制収容所の最末期の悲惨な状態は、第三帝国の全面的敗北を証明するものであった。死体の山をブルドーザーで壕に押し込むアメリカ占領軍撮影のブーヘンヴァルトの写真等は、ニュルンベルク裁判や映画『夜と霧』でも使われ、衝撃的末期状態を世界に知らせた。

「ユダヤ・ボルシェヴィズム」ソ連の征服を目指したヒトラー・ナチスの戦争は、逆にヒトラーがそのソ連によるベルリン完全包囲下に地下の総統大本営に追い詰められ、妻エヴァと最後まで忠誠をつくしたゲッベルス家族とともに自殺に追い込まれるという結果に終わった。ヒトラー・ナチズムの戦争は「ユダヤ・ボルシェヴィズム」の勝利、ソ連による東欧全体の政治的軍事的支配をもたらすこととなった。

東ドイツと東欧のソ連からの解放は、ソ連の平和的崩壊と長期にわたる東西「冷戦」の解体を待たなければならなかった。

文献

(1) 主たる史料：全16巻の史料集の第16巻。*Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945 (VEJ)* , Band 16: *Das KZ Auschwitz 1942-1945 und die Zeit der Todesmärsche 1944/45*. Bearbeitet von Andrea Rudorff, Berlin/Boston 2018. 引用においてページ数はVEJ 16: **, ドキュメント番号はVEJ 16/**. 他の巻からの引用も、同様に。

(2) 関連・参照文献リスト（詳細は永岑 [2022] 文献リストを参照されたい。）

ヴァンゼー会議記念館 [2015] 『資料を見て考えるホロコーストの歴史：ヴァンゼー会議とナチス・ドイツのユダヤ人絶滅政策（横浜市立大学新叢書 8）』 山根徹也・清水雅大訳、春風社。

ヴィレンベルク、サムエル [2015] 『トレブリンカ叛乱——死の収容所で起こったこと 1942-43』 近藤康子訳、みすず書房。

大津留厚 [2021] 『さまよえるハプスブルク——捕虜たちが見た帝国の崩壊』
岩波書店。

ギルバート、マーチン [1995] 『ホロコースト歴史地図 1918-1948』 滝川
義人訳、東洋書林。

コンラート、ゼバスティアン [2021] 『グローバル・ヒストリー——批判
的歴史叙述のために——』 小田原琳訳、岩波書店。

北村陽子 [2021] 『戦争障害者の社会史——20世紀ドイツの経験と福祉国家』
名古屋大学出版会。

ザスラフスキー、ヴィクトル [2010] 『カチンの森——ポーランド指導階
級の抹殺——』 根岸隆夫訳、みすず書房。

シュタングネット、ベッティーナ [2021] 『エルサレム<以前>のアイヒマ
ン——大量殺戮者の平穏な生活』 香月恵里訳、みすず書房。

チェア、ニコラス/ウィリアムズ、ドミニク [2019] 『アウシュヴィッツ
の巻物 証言資料』 二階宗人訳、みすず書房。

チョムスキー、ノーム [2004] 『秘密と嘘と民主主義』 田中美佳子訳、成
甲書房。

永岑三千輝 [2022] 『アウシュヴィッツへの道——ホロコーストはなぜ、
いつから、どこで、どのように——』 横浜市立大学新叢書13、春風社。

— [2021a] 「第三帝国の戦争政策とユダヤ人迫害——ポーランド1939年9
月～1941年6月——」 『横浜市立大学論叢』 社会科学系列、72-1.

— [2021b] 「第三帝国のソ連征服政策とユダヤ人迫害・大量射殺拡大過
程—— 占領初期1941年6月～9月を中心に——」 同上、人文科学系列、
72-2-3.

— [2021c] 「“ユダヤ人問題の最終解決”——世界大戦・総力戦とヴァンゼー
会議——」 同上、社会科学系列、72-2-3.

— [2021d] 書評：「菅野賢治 [2021] 『「命のヴィザ」言説の虚構——リ
トアニアの難民に何があったのか?』 共和国『週刊読書人』 2021-11-
12.

- [2019] 書評：「チェア/ドミニク [2019]『アウシュヴィッツの巻物 証言資料』二階宗人訳、みすず書房』『週刊読書人』2019-07-19.
- [2013]「1942年ドイツ軍需経済の課題とシュペーア：ナチス原爆開発 挫折の要因分析のために」『横浜市立大学論叢』人文科学系列、65-1.
- [2012]「ホロコーストの力学と原爆開発」横井勝彦・小野塚知二編『軍 拡と武器移転の世界史』日本経済評論社、第8章。
- [2010]「ハイゼンベルク・ハルナックハウス演説の歴史的意味——ホロコー ストの力学との関連で——」『横浜市立大学論叢』人文科学系列、61-3.
- [2007]「^{シュベツィアール・ヴァーゲン}特殊自動車とは何か——移動型ガス室の史料紹介——」 同上、社会科学系列56-3.
- [2001]『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社。
- [1994]『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』同文館。
- [1991]「ドイツ第三帝国のオランダ・ベルギー占領とその軍事経済的利用」 立正大学『経済学季報』40-4.
- [1988]「電撃戦から総力戦への転換期における四ヶ年計画—ドイツ戦 争経済の一局面」(一)(二)、同上38-2, 38-3.
- 鳩澤歩 [2018]『鉄道人とナチス——ドイツ国鉄総裁ユリウス・ドルプミュ ラーの二十世紀——』国書刊行会。
- [2021]『ナチスと鉄道——共和国の崩壊から独ソ戦、敗亡まで——』 NHK出版新書。
- フリードリヒ、イェルク [2011]『ドイツを焼いた戦略爆撃 1940-1945』 香月恵里訳、みすず書房。
- ヘス、アネット [2021]『レストラン「ドイツ亭」』森内薫訳、河出書房新社。
- ヘス、ルドルフ [1999]『アウシュヴィッツ収容所』片岡啓治訳、講談社 学術文庫。
- ポムゼル、ブルンヒルデ [2018]『ゲッベルスと私——ナチ宣伝相秘書の独白』 トーレ・ハンゼン解説「ゲッベルスの秘書の語りは現代の私たちに何を 教えるか」、石田勇治監修、森内薫・赤坂桃子訳、紀伊國屋書店。(ドキュ

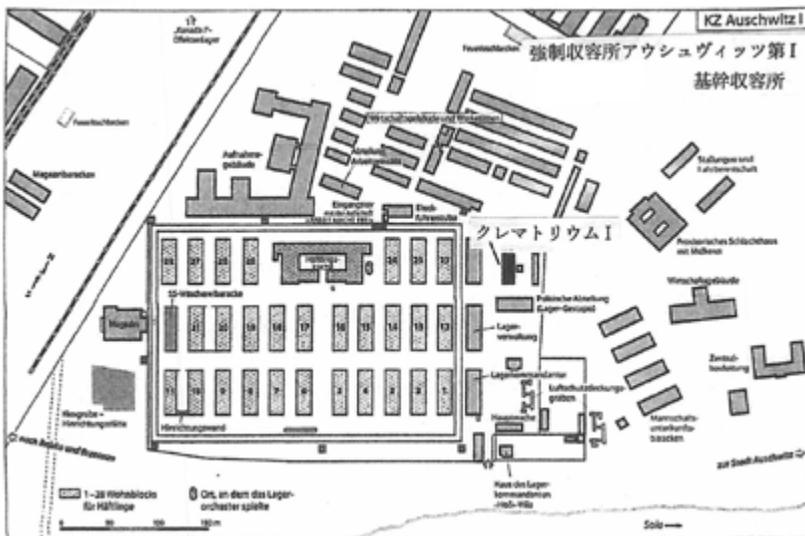
メンタリー映画『ゲッベルスと私』)

ボーンスタイン、マイケル/ホリンスタート、デビー・ボーンスタイン [2018]

『4歳の僕はこうしてアウシュヴィッツから生還した』森内薫訳、NHK出版。

リップシュタット、デボラ [1995] 『ホロコーストの真実：大量虐殺否定者たちの嘘ともくろみ』上、下、滝川義人訳、恒友出版。

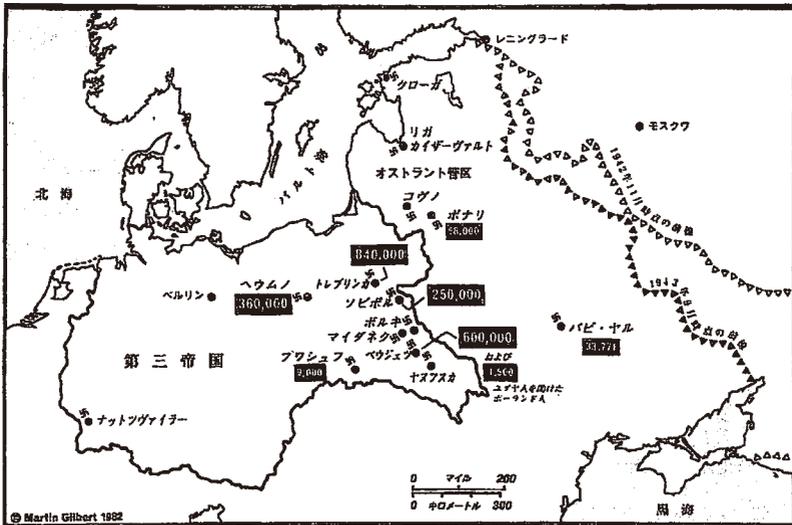
(投稿：2021年7月15日 父の命日に)



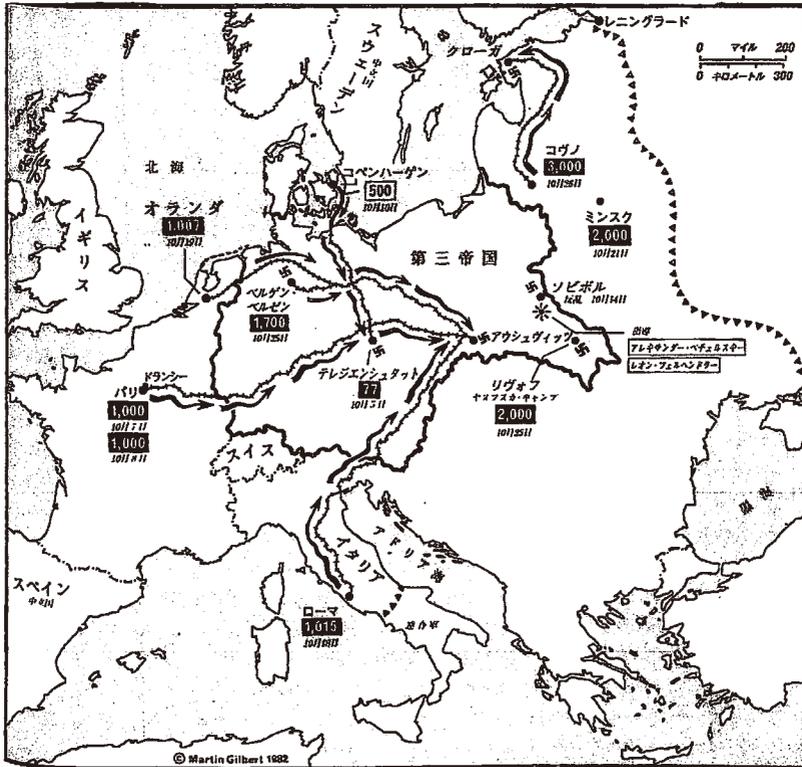
<付図 強制収容所アウシュヴィッツ第I 基幹収容所>



<付図 強制収容所アウシュヴィッツ第IIビルケナウ
出所：VEJ16裏表紙.>



<付図 絶滅収容所解体・痕跡抹消 1943年春—8月～完了11月>
 出所：ギルバート [1995] 217.



<付図 1943年10月ソ連赤軍前線とアウシュヴィッツへの移送>
出所：ギルバート [1995] 222.